徒歩で来るメリーさん

アッパーカット

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かかってきた電話の相手はメリーさん――じゃなくて、メリーさん見習いらしい。で、まだ移動能力が使えないから歩いてくるんだと。あいつのいる長崎から、俺の住む青森まで。

やれやれしょうがない、電話の話し相手くらいにはなってやるか。

これはだらだら暮らす大学生とてくてく歩くメリーさん見習いの、ありふれたひと夏の物語である。

＊この作品は小説家になろう様にも投稿しております。

目次

1にちめ　メリーさんと電話。――1
2にちめ　メリーさんと会話。――21
5にちめ　メリーさんと漫画。――31
10にちめ　メリーさんと勝負。――44
14にちめ　メリーさんと過去。――64
18にちめ――90
18にちめ　メリーさんの電話。――109
19にちめ　メリーさんと。――127

1にちめ　メリーさんと電話。

大学生の夏休みってやつは最高だ。

二ヶ月ほども続く、自由に使える時間。部活で青春するも自由。サークルでだらけるも自由。友達と海に行くのも自由。もちろんバイトで恋愛のチャンスを探りつつ稼ぐのも自由だし、ビッグサイトであまりの人の多さにすごすご引き返すも自由、ひたすら環状線に乗って電車男を目指すのも自由、インドに行ってエキゾチックインドパワーを身につけるのも自由だ。

夏の楽しみ方は人それぞれで、誰しもが思い思いの時間を過ごす。ただしここで注意しておかなくちゃならないのは、時間があるからといって何かをしなければならない義務があるわけじゃない、ってことだ。何をしていてもいい時間というのは逆説的に、何もしなくていい時間とも言える。即ち是れ、禅の概念である。

というわけで俺は現在、この昼間っからエアコンをつけた部屋の中で寝転がり、積ん読していた漫画雑誌を適当にパラパラとめくっていた。

およそ六畳のワンルーム、バストイレ付き。これはもう俺みたいな大学生がだらだらするためには最高の環境で、何をしていたって誰にも文句を言われない。外からは窓ガラス越しにセミがやかましく鳴き、俺の部屋の中では壊れかけのエアコンがガタガタうるさい。麦茶の氷が溶ける音だけが清涼だ。

海、山、川。

夏をエンジョイするのにはどれもいいところだし否定する気もないが、それでも俺としちゃ自宅に一票だ。素晴らしきかなマイルーム。たとえちょっと壁紙が破れていようと電灯が一本切れていようと換気扇から油のスメルがしようと、絶対的一人空間の安心感は何にも代えがたい。小さかろうとなんだろうと、自宅ってやつは一国一城なのだ。

さて、そんな具合に夏休みを謳歌し始めていた、ある日の昼下がりのこと。

その出来事は何の予兆もなく、唐突に起こった。

俺一人しかいないはずの空間に鳴り響く電子音。なんとなく聞き覚えのあるようなないようなその音程は、よくよく考えるとやっぱり聞き覚えのない気がする。

そう、それの指し示す事実はただ一つ。

――俺のスマートフォンが、鳴ったのだ。

「……地震かっ！」

俺は一瞬にしてその可能性に思い当たり、バッ！　と身を翻した。
なにしろ俺のスマートフォンは購入してこのかた、家族からの連絡と緊急速報の時だけしか鳴ったことがない。家族からの着信は個別の音に設定しているわけで、ならばこの聞き覚えのない音は緊急地震速報以外にありえない。
その的確かつ素早い論理的判断に従い俺はゴキブリもびっくりの速度でベッドの下に隠れ、次いでスマートフォンの画面を見た。
「……っ!?」
と、しかし。そこで俺は驚愕に包まれることとなる。
「馬鹿な！　電話、だと……!?」
そう――それはなんと、電話だったのだ。
いやもちろん、だからなんだってのはわかる。一般常識的に言ってスマートフォンが電話を着信するのは当たり前だ。スマートだろうがなんだろうが、フォンと言うからには電話であることに変わりない。
けれどもしかし、それは一般という常識の範疇の話である。そんなチンケな常識という枠を遥か踏み越えた位置に存在する俺のスマートフォンに限って言えば、その現象はほとんどありえないはずのことだった。
「あ、ありえん……！　俺のスマホの電話番号を知っているヤツがいるのか……!?」

何しろ俺は、家族を除いて誰一人にも電話番号を教えた記憶が無い。格好良く言えば俺のスマートフォンは、家族のもの以外のほぼ全ての電話機器と事実上孤立した、独立機器（スタンドアローン）なのだ。……電話としちゃ無能としか言いようがないが。

とりあえず地震ではなさそうなのでベッドの下からもそもそと這いでて、通話のアイコンをタップする。電話の奥から聞こえてきたのは若い……というか、幼い少女の声だった。

『……もしもし、もしもしっ！』

聞き覚えのない少女の声――つまり、間違い電話だ。

俺はふむ、と小さく唸った。間違い電話、間違い電話ね。……まあそりゃ、可能性としちゃあるよな。いくら俺の電話番号を誰も知らないと言ったって、番号自体は存在しているわけだ。間違い電話くらいはかかってきてもおかしくない。

……ならばともかくここはひとつ、間違い電話で狼狽えている少女に優しく接してやるのが大人としての風格ってやつじゃないだろうか。俺は小さく咳払いをして、優しげな声を繕って応えた。

「はいはい、どちらさん？」

『あのっ！　私、メリーさんと』

「ほいっと」

ピ。

通話終了のアイコンを押すと、そんな軽い音が鳴った。

電話のいいところは、相手の顔を見ずに面倒臭くなったらすぐ中断できるところだ。田舎のばっちゃがそう言ってような気がする。たぶん言ってないが。

スマートフォンを放り出し、ふぅ、と俺は息を吐き出した。

知ってる。これはアレだ、メリーさんとかいう都市伝説のマネだ。

察するに、夏休みで暇を持て余したどっかの女の子が、適当に番号を入力していたずら電話をしようとしたら、たまたま俺に繋がったってとこだろう。間違い電話ならともかく、年下の少女だろうが可愛いロリ声だろうが、イタ電に真面目に応対するほど暇じゃない。

そんなわけで漫画本を拾い上げて読み直そうと寝そべると、またスマートフォンが鳴った。表示はさっきのと同じ番号だ。

速やかに通話終了のアイコンを押すとスマートフォンは沈黙する。

そのまましばらく漫画本を読みふけっていると、ピロン、と小さな音が鳴った。

画面を見ると、立ち上がっているのは無料通話アプリだ。

大学入学時のレクリエーションでふるふる機能を使って友達追加した後、一件もやりとりが存在せずにメモリを食う置物と化していたアプリが、いまさら何を受信したとい

うのか。

興味を惹かれて見てみると、やたらと長文がずらずらと書かれていた。

『夏の日差しが厳しい季節ですが、いかがお過ごしでしょうか。初めまして。私、メリーといいまして、都市伝説見習いというものです。突然、不躾なお願いになるのですが、もしよければ電話に出ていただけないでしょうか。もちろんお時間をとらせるつもりはないですし、話し相手になってもらおう、なんてそんな図々しいことを考えてはいません。とはいえその、最初の口上くらいは聞いていただけないと、メリーさんを目指す私としては、かなり精神的に苦しいものが……

（中略）

……それでそれで、私頑張っちゃおうかななんて！　やっぱりメリーさんといいますと、この業界ではちょっとは名の知られた都市伝説ですから。だから私としても、頑張って見習いじゃなくて本物のメリーさんになりたいな、と思うのです。ですからその、もしご迷惑でなければ、電話に出ていただけないでしょうか……？』

「……」

……なんじゃこれ、が感想である。

なかなかぶっ飛んでいる。赤の他人に自分の世界観を押し付けるというのはどうかと思うものの、こうも凝っていると遊びにしても上等だ。

そんなことを思っていると、再びスマートフォンが鳴った。
今度は出てみると、開口一番で怒涛のごとく喋られる。
『……あっ、繋がりましたやったー！　あ、あのですね、名乗れないまま即切りされるのは、かなり精神的につらいのです。存在の意義がガリガリ削られるといいますか自分が世の中に必要とされない喪失感といいますか……。その、メリーさんといいますと、割と口上が本体みたいなところがあるのです！　お願いです切らないでください！』
ころころと情感豊かな少女の声は、最後らへんには泣き声混じりになっていた。
俺はその少女の様子に、誠実な言葉を返した。
「電波悪いせいかな。なに言ってるか聞こえねーや。……切るわ」
『き、聞こえていないのですか!?　ど、どうして……!?　はっ、もしや通話料が……!?　そんな、そんなことって……！』
「クッ……なんか聞こえる気がするが微妙に聞こえない。これが磁気嵐か！　おのれ磁気嵐！　……確か最新の学説によると、磁気嵐に有効となる声の音波形は恥ずかしいけどお兄ちゃんに甘えてくるクーデレ義妹風の口調だったか……？」
『へっ!?　え、えーと、えと……きょ、今日は出かけするのではなくて、私と一緒にお話ししませんか？　……その、私はもっと、あなたのことが知りたいのです』
「８０点。上出来だ」

『えへへ、ありがとうございます。……いえ、絶対最初から聞こえてましたよね？　というよりもそれ以前に、わざわざ義妹である意味とは……？』

「馬鹿か実妹だと萌えらんねえだろ。で、誰？」

　尋ねると少女は、沈痛な声で答えた。

『……メ、メリーさんは挫けないのです。え、えっとですね、こほん。私は、メリーさん見習いのメリーといいます。今回、あなたを標的として定めることになりました。よろしくおねがいします』

「へー。……若そうな声だな」

『見習いですのでっ！』

　えへん、とばかりに言い放ったメリーとやら。

　威張ることじゃないと思うんだが。

「そっかそっか見習いか。……で？」

『へ？　なにがです？』

「いや、メリーさん見習いですって言われても。そこからどうするんだ？」

　……ここで一つ、白状しよう。

　正直なことを言えばこの時の俺は、全くもってこの少女をバカにしていた。ちょっと、いやかなり電波な少女が、夏休みの暇を持て余して電話を使ったイタズラをしてい

るのだろうと。その妄想に付き合って、からかいたおしてやろうと思っていたのだ。
が。その侮りは、次の瞬間に完全に覆されることになる。
『……？　決まっているではないですか。私はメリーさん見習いですから、あなたのところに行くのですよ。ええと、萩村アキラさん』
「なっ……!?」
俺は何も言えない。……当たり前だ。なぜならそれは、俺の名前だったんだから。
アキラって名前はありがちだからともかく、萩村なんて名字はあてずっぽうに一発で当てられるものじゃない。なら、知り合いか？　俺がこの少女を忘れているだけか？
……いや、それは無い。話し方からしてこんなに強烈な少女を忘れるはずがない。
俺の友達から番号を聞き出して電話してきた……はないか。俺、友達いねーし。
『アキラさん、でいいでしょうか？』
「いや、待て！　……お前、なんで俺の名前を知ってる」
『え？　……だって私、メリーさん見習いですし』
「いや、そんなの」
あるはずないだろ、と言おうとした俺の言葉は遮られた。
『あっ、もしかして信じていませんか？　……ふふふ、でしたらメリーさんの力を見せちゃいます！　怪談目都市伝説科メリーさん属の怪異、由緒正しいメリーさんの見習い

であるメリーの力、相手の素性を見抜く千里眼を！』

怪異ってそんな生物系統みたいな分類できんの？　というツッコミを入れる隙もなく、メリーは喋り始めた。

『ふむふむ。アキラさんの生まれは北海道ですか。まだ行ったことはないですけど、やっぱりメリーさんとしては一度くらい足を運ぶべきところだと思います。……そしてえーと、家族構成は両親とアキラさんと妹が一人ですね。あ、なるほど。ですから実妹では嫌だと……？』

「これほど余計なお世話を久しぶりに聞いたぜ！」

『中学、高校と優秀な成績で進み、今は青森県の国公立大学に在学中、と。……青森、ですか』

と、ここでメリーの声が少し引きつった。

ちょっとムッとした俺は反論する。

「青森が悪いか？　いいところだぞ青森。人は少ないし土地は広くて家賃も安い。それにりんごとさくらんぼ超うまいぞ。めちゃくちゃ住みやすいぜ」

『へっ!?　そ、そういうわけではなくて……いえ、これは後にします。それで今は、と……へ、変態！　変態変態変態！』

「!?」

と、いきなりメリーが変態と連呼しだした。
わけがわからん。
「……どうした、変態が現れたのか？　ならとりあえず逃げろ。間違っても戦おうとか考えずに逃走に徹しろ。この夏の時期、暑さに頭をやられた変なのも増えてくる季節だ。ひとまず通話を切って１１０番を……」
『ち、違います！　あなたですよ変態は―！』
……んん？　首をかしげる。
これはもしや、俺が？　俺が変態と呼ばれているのか？
この真摯な紳士である俺が？　まったく、冗談キツいぜ。
「おいおい、何言ってんだメリー？　よくわからんがなんでいきなりそんなことを」
『その手に持ってる本はなんですか！　こんな昼間から！　……へ、変態です！』
その声に従って、俺はつい直前まで読んでいた漫画雑誌に目を落とす。
ふむ。表紙にはなかなか際どい姿の女性の姿が載っている。……確かにまあ、硬派とは言えないが、売り上げを伸ばすためにはわりかしよくあることだろう。普通だ。
ちょっとばかり中身をパラパラとめくると、ストーリーに沿った人間ドラマが描かれている。そりゃ漫画だからな。これもまた普通。……今のところ変なところは無いな。
巻末の宣伝ページなんかには、ちょっとばかりいかがわしい内容のものもあったりす

る。まあ確かに子供には刺激が強いかもしれないが、けれどもこの程度の内容、雑誌にはつきものだ。普通だろう。

俺は漫画雑誌を閉じ、やれやれと肩を竦めた。

いやはや、言いがかりもいい加減にしてほしい。……しかしまあもしかしたら、年若い少女にはこんな雑誌でも刺激的なのかもしれないな。ちょっと過敏に反応してしまったからといって、あんまり責めてやるのも可哀想かもしれない。そんなことを考えながら俺は最後に背表紙を見て、題名を心の中で読み上げる。

『月刊ハイパーエロス』。……ふむ、エロ本だ。

必死に言い訳を考えながら、反論を試みる。

「いやお前、これ別にエロ本じゃねーし。エロいとか言う奴がエロいんだし」

『い、言うに事欠いて私のせいに！』

「つーかアレだし。まあ、これがもし仮に、万が一、億が一エロ本だとしても？　エロ本を読むのは別にエロくねーし。だってほら、購入されるために売られてるわけだろこういうのは。人類が生まれてより数百万年、ようやくたどり着いた発展の境地、高度な経済活動の結果にエロいとかエロくないとか、そういう観点を持ち込むのはどうかと思うぜ俺は」

『人類のたどり着いた境地がそこなのですか……!?』

メリーの声に絶望感が漂った。
安心しろメリー、俺もおんなじ気分だ。
必死に頭を回転させ、違う切り口を探し出す。
「いやいやメリー、ちょっと考えてみろよ。むしろそれは反対だ。『エロいものを昼間っから見ている』じゃなくて、『エロいものを昼間っから見れるわけがない』だろ？　つまり逆説的に考えて、これはエロいものじゃなく芸術なんだよ。見ろよこの、生々しくも瑞々しい生衝動を描き切った性描写を」
『わぁこの人、無茶苦茶なことを言ってます！』
「無茶苦茶じゃない。古来から芸術ってのは言ってみればエロだ。エロが芸術を作った。素直な心で考えろ、ミロのヴィーナスもミケランジェロのダビデ像も全裸だ。つーか昔の絵画とか全裸ばっかだ。その必要があるか？　……たぶん当時の人間は、エロ本がわりに絵画を飾っていた。それが今じゃ芸術だ。つまり、このエロ本だって千年経過すれば芸術なんだよ。そう考えるとだな、俺がこれを読んでるってのはいわば、未来の感性の先取りに値するわけだ。……わかるか？」
『わかりませんよ!?　芸術界に喧嘩を売りたいのですか!?』
「……あああーうるせぇぇえ！　だいたい俺は大学生！　エロいもん昼間から読んだからなんか悪いか!?　ああ!?　ええ、どうなんだよ人様の性癖を覗き見するのが好きな

メリーさん見習い！　見るか!?　じっくりと拝見するか!?　この舐め回したい右足の中指の感じとか最高だよな！」

逆ギレしてバッ！　とエロ本を空中に見せつけると、電話越しに『ひぅっ』という小さな声が聞こえた。

『わ、わかりました私が悪かったのです！　人の生活を勝手に見た私が悪かったのです！　だ、だからその、わ、猥褻物を隠してください……』

その声に免じて、俺もエロ本を布団の下に隠す。

「……まあ、ムキになりすぎた。悪いな」

『い、いえ。その、もともと勝手なことを言った私が悪いので……』

「言われてみればその通りだな。勝手なことを言ったお前が悪い。……なんだよ、謝る必要なかったじゃねーか。ったく俺は人生で百回しか謝らないと決めているのに」

『少なっ！　まともに社会生活を送るつもりが無いのですか!?』

「これまでの人生で九百五十六回謝ってる。内訳は母親が百二十一回、父親が九十六回、妹が五百三十三回、他人が二百三回だ」

『信念ボロボロじゃないですか！　そして妹さんにどれだけ謝っているのですか!?

……うー、まあいいです。私がメリーさん見習いだということを信じてもらえましたか？』

その声に俺は、ちょっと悩んだ。

俺の個人情報はまあ、やりようによっちゃ調べることはできるだろう。しかしながら俺がついさっきエロほ……芸術作品を鑑賞していたなんてことが、そう簡単に調べられるとも思えない。この部屋を現在絶賛盗撮中とかだったら見張ることもできるかもしれないが、そこまでされるような何かが俺にあるとも思えない。

つまりはこの少女、もしや本当にメリーさん見習いとやらなのではないだろうか？

「まあ、そうなのかもしれんが……」

『よかった、信じてもらえて……』

「……だがここは一つ、お前がメリーさん見習いだという証拠を見せてもらおうか！」

『しょ、証拠っ!?』

動揺したメリーさん見習い（仮）に、俺はビシッと要求を突きつける。

「メリーさんというのは美人だと聞いている。つまりメリーさん見習いのお前も美少女でなければならない。ここまではいいな？」

『……あ、あれー？　メリーさんってそういう都市伝説じゃないんですが……。それは確かに、もともとが西洋人形ですから見苦しいということはないでしょうけど』

「美人に決まってんだろ！　ついこの前、俺はそういう設定のｓｓを見たぞ！」

『空想と現実の区別がつかないタイプの大学生さんでしたか!?』

「それ、メリーさんとかいう都市伝説を名乗るお前が言っちゃ駄目だろ……。まあいい、とりあえず、今の日付や時刻が一緒に写り込んだ自撮りを送ってくれ。そうでもなければ、なんらかの悪徳商法かなんかだという疑問が捨てきれん」
『用心深いのですね……』
「大学生の一人暮らしなんざ用心深くなって当然だ。世知辛い世の中だぜ」
『そ、そうですか。……えっと、都市伝説組合の決まりで写真への顔出しはＮＧなのですけれど、いいでしょうか？』
「……まあ許してやろう」
　そう答えると、わかりましたーと言って一旦電話が切れた。
　と、一分ほど経ってから無料通話アプリに写真が送られてくる。
『どうですか？』
「アレがお前？」
『そうです。よく撮れていますか？』
「ん、そうなんじゃねえの？」
　それからさらに一分後にかかってきた電話に応えながら、写真を思い返す。
　一緒に写り込んだ紙切れに書いてあったのは今の日付と時刻で、今撮られたものだということを証明していた。

白いワンピースに麦わら帽子と、いかにも夏の少女といった出で立ち。前かがみになって眼の部分を手で隠しながらも、僅かに微笑む口元。正直いかがわしい写真にしか見えなかったがそれはともかくとして、俺にはわかる。アレは美少女である。

そして美少女ならばこの世の出来事の９９％は赦される。だってほら、なんなら多分タバコとかだって、パッケージを萌え絵の美少女にして『吸ってぇ……。お願い、私を吸ってぇ……』とか喘いでる感じにしたら俺は買うもん。そういうもんだし。

つまりは実在すら怪しいメリーさんという都市伝説のさらに見習いとかいうよくわからんものであっても、存在が赦されるわけである。

「まあいい、認めてやろう。……フッ、俺も甘くなったもんだぜ。尖ってた昔の俺なら、お前が嫌がろうとどうしようと、無理矢理に俺好みのポーズを強制して羞恥に塗れた表情を撮らせていただろうよ。フニャフニャになった俺に感謝するんだな」

『フニャフニャにってもうちょっと言いようは無いのですか……？　というか昔のアキラさん、それただの危ない人じゃないですか。ほとんど犯罪です』

「まあ、実際に強要したらめっちゃ嫌われたんだけどな」

『やったんですか!?　誰に!?』

「妹に」

『だから謝りまくっているのですね……』

なんとも形容しがたい沈黙を漂わせるメリーに、俺はチッチッチと指を左右に揺らす。

「メリーよ、人生ってのは綺麗事じゃない。人を好きになることもあれば人に嫌われることもある。必要なのは、嫌われることすらも人間関係の一環と捉える度量だ。そして、土下座すら厭わない高潔な精神性だ」

『そこは厭ってください！　ちょっといいことを言ってると勘違いしちゃったじゃないですか！』

「わかるぜ。俺にもそういう時期があった。人の言うこと全てがくだらなく聞こえる時期ってのがな。……だが、歳を経るごとに気付くんだよ。くだらないことのために行動できなかった俺が青かったんだなって。大人ってやつは、くだらないことをくだらないことだとわかってて、それでも行動できる奴を言うのさ」

『青春小説のラストみたいなセリフですね』

「……フッ、まだメリーには早かったか」

俺がそんな感じに話を締めくくると、何やら『私はこの人を相手にどうすればいいんですか……!?』と呟いているのが聞こえた。

と、ここで俺はふと思った。

ちょっといくらなんでも、初対面の相手にふざけすぎだろうか。

実のところ俺は、人を相手にするのが下手らしい。いや、別に俺自身は口下手なつもりはないしそんなに変なことを言っている自覚もないのだが、実際として友達が一人もいない現状を鑑みれば、やはり人づきあいが下手なのだろう。

要するに俺は、適当と不適当の境がよくわからないのだ。うちの妹の言うには空気の読めない男、つまり英語で言うところのノーリーディングエアーマンであり、そして大学ではエアーマン。それが俺という人間であるらしい。

「すまんメリー。充電切れそうなんでな、とりあえず切るわ」

というわけで気を遣ったつもりでそう言うと、『ええー!?』と聞こえてきた。

『も、もうちょっとお話ししませんか……?』

……なんとも意外なことに、その声には本当に残念だという感情がこもっているような気がして、ちょっと驚く。

だがまあ、一度言ってしまった手前、『今いきなり充電百パーになりましたァ!』とか言うわけにもいかない。

「今日はひとまずな。……まあ、明日またかけてきてくれりゃいいさ。暇だったら相手になってやる」

『ほ、本当ですか!?　やったー!　それなら明日、またこの時間にかけます!』

「お、おう?」

『それでは、失礼します』

小さな『頑張って歩くぞーー！　おーー！』という掛け声を残して、電話は切れた。

「歩く？　……結局なんだったんだ」

首を傾げながら思う。結局、何がしたかったのかよくわからん。

俺はとりあえずメリーからの写メを保存し、ついでにメリーの番号を電話帳登録し、夏の昼下がりの読書に戻るのだった。

2にちめ　メリーさんと会話。

「……長崎？」
『はい。……青森までは大体、二千キロくらいでしょうか』
「で？　その距離を移動すると？」
『はい。徒歩で』
　その次の日。俺は再び同じ時間に掛かってきたメリーの電話に、呆れ声を出していた。
「いや。いやいや。いやいやいや。メリーさんって違うだろ。なんかもっとスマートな、アサシン的なスタイルの使い手じゃねーの？　ＭＭＯなら索敵スキルと移動スキルに極振りしたみたいなジョブだろ」
『いえその、私としてもそうだとは思うのですが……』
「それが何？　徒歩？　歩き？　ウォークマン？　それでいいのかメリーさん」
『ウォークマンは違います。……うー、その。私としてもメリーさんとして酷い体たら

くだということはわかっているのですよ』

　さて、今日もまた昨日の言葉通りに俺はこのメリーさん見習いことメリーちゃんなる少女と電話で会話していたのだが、このメリーちゃん、なかなか無茶なことを仰っている。

「いや別に、責めようってんじゃないけどな。二千キロを歩きでって無理があるだろ。……そもそも、なんで歩きなんだ。仮にもメリーさんって都市伝説だろ？　なんか固有能力みたいなのねーの？　電話から電話までワープできるとか」

『あ、よくわかりましたね。本来のメリーさんにはその能力がありまして。電話の向こうに気をつけろ（ハイド・イン・シーク）という能力なのですが』

「かっけぇ！」

　異能ッ！　それは永遠の夢と憧れ！

　俺はちょっとテンションが上がった。

　なんか微妙にルビと内容が合ってないとか千里眼は千里眼でなんでこっちだけ凝ってんだとか若干ツッコミどころはあるが、それはそれでこれはこれ。男ってのは何歳になっても異能に憧れる生き物なのだ。

　しかしなおさら疑問が残る。ならばなぜ、メリーは日本列島を徒歩で縦断するなんて酷い状況に陥っているのだろうか。

『私、見習いなので。その能力は未取得なのです。スキルポイントが足りないらしくて……』

「ポイント式だと!?」

……えー。

異能という言葉で上がっていたテンションが、やや落ち込んだ。……なんかこうな、そういうのじゃなくて、『我が一族に秘められし禁忌の業……!』とかそういうノリを求めていたんだよ俺は。わかる？　……わかんないかー。そっかー。

『しょ、しょうがないじゃないですか！　だって千里眼が無いとそもそもメリーさんとして成立しないので……。持っていたスキルポイントは全部、千里眼に使ったのですよ』

「まあそりゃ、移動能力だけ持ってててもどうしようもないってのはそうかもしれんが」

だって千里眼がないと、それただの電話かけて現在地聞いてくる人だもんな。ただの不審者だ。

それに比べりゃ確かに、千里眼のほうがマシかもしれん。相手の場所が分かれば、とりあえずはメリーさん的なこともできそうだし。

「……だからって、歩きか？」

『だ、だって……お金ないですし。乗り物もないですし』

「ふーん……じゃ、ヒッチハイクすればいんじゃね？」
適当に言ってみたことだったが、案外いい考えのような気がした。
これでメリーの見た目がオラついた筋肉タイプとかだったら無理かもしれないが、幸いにもメリーの見た目は華奢な美少女だ。ヒッチハイクも、やってやれないということはないだろう。そりゃ都合よく目的地まで一直線に到着するってのは難しいかもしれないが、それでも歩くよりは断然いいはずだ。
……いや、ああでも、そうか。だからこそ安易に勧めるのも考えものなのか？　この世知辛い世の中である。美少女だからこそ、よからぬことを考えるやつもいるだろう。だったら安易に勧めるのもよくなかったかもしれん。
そんなことを考えていた俺だったが、しかしメリーの返答は俺の予想とは違っていた。
『いえいえアキラさん。やはりメリーさん見習いとしては、ヒッチハイクをするわけにはいきません』
「ほーん？　理由のありそうな口ぶりだな」
『ええ。とはいっても、アキラさんから見ればどうでもいいことなのかもしれませんが。……アキラさん、私のような都市伝説が何から成り立っているのかご存知ですか？』
「おいおいバカにしてんのか？　こちとら大学生だぜ、それくらい知っている」

『そうでしょうそうでしょう。実のところ都市伝説というのは……って、ええ!?　知っているのですか!?　最近の大学ではそんなことを教えるのですか!?』

驚きを見せるメリーの声に、俺は肩を竦めて応える。

「フツ、こりゃ独学だよ。いいか、人体は水３５Ｌにアンモニア４Ｌ、石灰１．５ｋｇにリン８０００ｇ、塩分２５０ｇ、それに」

『いえ、いいです。とりあえず間違ってます。都市伝説じゃなくて人体って言っちゃってるじゃないですか』

「ふざっけんなてめぇ！　必死こいて覚えたんだぞ！　これまでそれっぽいシーンが来たら言おう言おうと頑張って覚えてたんだ！　最後まで言わせろ！」

『え、ええ!?　ご、ごめんなさい……？』

人の努力に泥を塗ろうなんて酷え話だ。こちとら覚えて以来、いつこの人体の材料を全部述べた後でニヒルな表情で『人間なんて安いもんだぜ』と言ってみようかと、ニヒルな表情まで練習していたのだ。結局、一回もそんなシチュエーションに出くわさなかったのでこれまで役立たずの知識だったが。

ちなみにこの類の知識として、俺は他にもピカソのフルネームなどを暗記している。これもまた、今まで一度も役に立ったことがないが。

俺は朗々と人体の材料を暗唱し、メリーに聞いた。

「で？　都市伝説って何でできてんの？」
『こ、この人は……！　……はぁ、もういいです』
　メリーはちょっとため息をつき、それから話し始めた。
『まずそもそも、都市伝説……というか怪異ですね。そういうオカルトに分類される存在というのは、人の想像力から生み出されているのですよ』
「へー……そういうものなのか？」
『そういうものなのです』
　正直、そんなこと言われてもへーとしか言えない。だって全然イメージが湧かないし。
　が、まあここは頷いてみる。
「『幽霊の正体見たりクレオパトラ』って俺も聞いたことがあるしな。言われてみりゃそうなのかもしれない」
『幽霊の正体は世界一の美女だったのですか!?　枯れ尾花ではなく!?　……ま、まあともかく。都市伝説というのは、人々が『こういうものだ』と思うイメージそのものなのですよ』
「まあ、そうじゃなきゃ都市伝説として成立しないもんな。口裂け女がハサミじゃなくてチェーンソー持ってたら、それはもう口裂け女じゃなくてジェイソンだし……あ、そ

ういう話なのか？」

俺はポン、と手を打った。

なるほど、それなら確かにメリーがヒッチハイクできないってのもわかる気がする。ヒッチハイクするようなメリーさんはメリーさんじゃない、と。だからメリーはヒッチハイクすることができないのか。

しかし、メリーの答えは微妙に違っていた。

『半分正解で、半分不正解です』

「半分？」

『はい。……そのですね、別にヒッチハイクすること自体がメリーさん失格というわけではないのです。確かにそれがあまり多くの人に知られるのは良くないですけど、バレなければいいのです、バレなければ』

「業界の黒い裏話みたいだな……」

『だって、そんなことを言ったら私が歩いているのもダメになっちゃいますし……』

「ん、ああ……そうなるのか」

そりゃそうだな。だって別にメリーさんって移動手段がメインの都市伝説じゃないし、ヒッチハイクも歩くのも似たようなもんか。

「じゃあ、なんで？」

『縄張りです』
「はっ？」
　しかし、電話の向こうから聞こえたその言葉には、聞き返さざるを得なかった。
「犬猫かお前らは」
『縄張りといっても、意味合いとしての話ですよ？　……実はですね、都市伝説の禁則事項というのは、都市伝説組合で詳細に決められているのですよ』
「……あえて昨日から聞くまいと思ってたが、その都市伝説組合ってなんだよ」
『都市伝説の互助組織です。ほら、インターネットが広まってからは情報化が進んで、流行り廃りが速いので生半可な都市伝説だったらすぐに消えちゃいますし。新たに生まれた小さな都市伝説の灯火を絶やさないために、都市伝説同士の連携を密にして、共存する努力を続けているのが都市伝説組合なのです』
「なんつーか、都市伝説も世知辛いな……」
　人間だって生きるためには面倒臭いことややりたくないことがいっぱいだが、都市伝説も似たようなもんなのかもしれない。いや、あるいは更に厳しいのかもしれない。だって、忘れられたら消滅だもんな。言ってみれば人気を取り続けなきゃならないアイドルみたいなもんだ。
『そうしないと生き残れないのですよ……。まあともかくそれの禁則事項で、『他の都市

伝説の領分を犯すような行動は極力とってはならない』と決められているのです。ヒッチハイクの場合ですと、濡れ女さんとかですね。その辺りからクレームが入ってしまうので、迂闊な行動はできません』

「めんどくさっ！　……え、じゃあなんなん？　走ったりするのもアウト？　ターボババアとか」

『いえ、ターボババアさんは車並みの速度で走るので、少なくとも私がターボババアさんの領分を侵すことはありません。……でもローカルには結構、『夜中に子供が道路を徘徊している』とかそういう都市伝説があるので、そういう地域は避けて通らなければなりませんし……』

「苦労してんなー……」

そんな配慮をしつつ、それで二千キロを歩き切る。

なんかもう想像がつかないが、俺のような平々凡々な日々過ごす人間には及びもつかない世界ってのがあるもんだ。

『大変ですけど、でも……私はメリーさんになりたいですから。だから、頑張るのです！』

「そか。……じゃあま、頑張れ。歩いてる途中の暇つぶしになるってんなら、電話の相手くらいしてやるよ」

『やったー！　ありがとうございます！』

えへへ、と小さく漏れる嬉しそうなメリーの声。

聞こえて来たその声に、どうしてだろう。俺はほんの少し、通話音量を落とした。

そのはにかむように笑う声は、俺にはちょっとばかり明るすぎるようだった。

5にちめ　メリーさんと漫画。

「お、マジで？　メリーも読んだことあんの？」
『はい！　裏・四天王が倒されて真・四天王が出て来たところの迫力は最高です。もうとにかく、ワクワクしちゃって……』
「おお、わかってるじゃん。まあ俺的には、四天王・改と戦った後にスカイキング・オブ・フォーが出て来たあたりが好みなんだけどな」
『わかります、あれも名シーンでしたねえ……』
　話し始めて数日が経ち、俺とメリーはなんとなく気安くなってきて、結構話が弾むようになっていた。
　今日の話題は、一昔前に連載終了した少年漫画である。ちょうど今、古本屋でまとめて買ってきた単行本を読み進めているところだったのでふと話題に出してみたら、案外とメリーが食いついてきたのだ。
「しかしメリー。お前、漫画とか読むんだな。こんなふうに一緒に漫画の話ができると

は思わなかったぜ」
『あ、あはは。……まあその、最近は電子書籍の時代ですから。スマートフォンでも案外と、書籍を読むには苦労しないものなのです』
「お前ホントに都市伝説か？」
　電子書籍とかなんとか、オカルトとは真っ向から相反する気がするんだが。
　なんか機械とか、オカルトの前じゃ壊れそうだし。
『いえいえアキラさん、私たち都市伝説というのは伝達と流布を介して存在するものですから。確かに機械そのものとの相性はあまり良くないですけど、ネット回線との相性は悪くないのですよ』
「なんかまたよくわからん話だな……まあ、歩きスマホには注意しろよ？」
『そのあたりは大丈夫です。私のスマートフォンは仮想展開型スマートフォンですので』
「お前は本当に都市伝説か!?」
　なんだそのＳＦ感漂う素敵デバイスは。世界観が違う。
　なんかあれか、よくアニメとかで見るホログラム的なヤツだろうか。
「……ちょっと待て。え？　俺、今までお前と電話してると思ってたんだけど、今のお前、外見上は独り言しながら歩いてる人なのか？」

少々想像してみよう。
夏。燦々と太陽。陽炎の浮かぶ道路。歩く少女。麦わら帽子に白いワンピース。そして延々と独り言。……とてもじゃないが、お近づきになりたくない。
というかだ、それ以前にどうやって自撮りしたんだよ。
と、メリーがその疑問に答える。
『ああいえ、そうではなく。霊力で構成されているスマートフォンですので、仮想展開が基本ですが実体として取り出すことも可能なのです。超次世代型ウェアラブル端末といったところでしょうか』
「どの世代の次世代だよ。ジェネレーションギャップデカすぎだろ……。要するに、俺と話すときやら自撮りするときやらはスマートフォンを実体化させてんのか？」
『はい、そういうことですね』
どっちかというとオカルトってよりＳＦみたいな話だ。やりたい放題かよ。
つーかもはや人間の技術力を超えてるしな。この地球上で一番の知的生命体の座は、もしかしたらもはや人間のものではなく、怪異のものなのかもしれない。
「俺としちゃやっぱ、霊力といえば霊界探偵なんだけどな。メリーさんも霊力の使い手だったとは恐れ入った。お前も霊丸とか撃てんの？　羨ましいもんだ」
『いえ、私は戦闘タイプではないので。……というかアキラさん、霊力を使ってみたいの

ですか?』

と、そのメリーの言葉に俺は、がばっと顔をあげた。

「使えんの!?　そりゃお前、使えるなら使ってみたいに決まってんだろ!」

『そ、そうでしたか……。先輩に聞いた、人間にも霊力を扱える方法がいくつかありますので、それをお教えします』

その言葉を聞いた俺は、ごくり、と唾を飲み込んだ。

これは。もしやこれは、俺の時代が来たんじゃないか……!?

具体的に霊力で何ができるのかは知らんがそんなもんは後だ。なんかよくわからんがぼんやりと光が灯ったりするんだろう。まずとりあえずは霊力を手に入れることが先決なのだ。

手にいれさえすれば後は霊力を鍛えるだけ。俺はもともと妹とかから『幽霊みたい』と陰口を叩かれているので、きっと、いや間違いなく霊力との相性はいいはずだ。いずれは当代最強の使い手として呼び讃えられることも視野に入る……!

俺は輝かしい未来のために、電話の向こうから聞こえてくるメリーの声に耳を傾けた。

『ええとですね、まず下敷きを用意してください』

「下敷き?　……これでいいか」

その辺に転がっていたものを適当に手に取る。
『次に、下敷きを布などで激しく擦ってください。この時は裂帛の気合を込め、気持ちが入っていればいるほど効果が高いそうです』
「うおおオオオオオオ！　燃えろッ、俺の小宇宙（コスモ）ッ！」
ガシュガシュガシュという擦れる音が響き渡る。
これほどの熱意、通じぬということはあり得まい。
『そして立ち上がり、下敷きを携えて鏡の前に立つのです！』
「なるほど！　次に!?」
『下敷きを、頭上にかざしてみてください』
「う、うおおっ……！　こ、これは――!?」
なんということだろう、俺の頭頂部に生えている髪の毛が下敷きへと吸い寄せられ――へにょっと張り付いているではないか！
理解（わか）る……理解（わか）るぞ……！　この肌がピリピリするような独特の感覚、これこそが霊力特有の波動……！　間違いなく霊力の顕現の証……！
今はまだ、髪をちょっと持ち上げる程度の小さな力に過ぎない。しかしこれから研鑽を積み、力の拡散や収束といった訓練の日々を重ねていけば、いつかは……！
「……ってただの静電気だろチクショウ！」

俺は怒りのままに下敷きを床に叩きつけた。フローリングにぶつかって立てるぺちんという音が物悲しい。がくりと膝をつく。

いや、まあね？

俺だって馬鹿じゃない。思ったさ。どう考えてもこれは違うよなって。静電気だよねって。

でもメリーを信じて実行したらご覧の有様だよ！

『ご、ご不満なのですか……!?』

「不満しかねえよ！　今は夏だから空気が湿って静電気の強さもイマイチだしさぁ！　もっと大きな夢を見せてくれよ！」

『で、では筋肉の微弱電位を束ねて大電力とする技法を……』

「霊力じゃなくて電力って言っちゃってんじゃねーか！　つーかそれ武装現象（アームド・フェノメノン）だろ！　できてたまるか！」

どこの来訪者だよ。バルバルと効果音が聞こえてきそうだ。

メリーを責めると、何やら言い訳をしてくる。

『で、でも……！　私、先輩からなんかそういうふわっとしたやつが霊力だって聞きましたよ!?　人間に聞かれたらこうやって教えろ、と』

「先輩に首を洗って待っていろと伝えておいてくれ」

いたいけな人間の心を弄ぶとは……！　これこそがつまり、いともたやすく行われるえげつない行為……！　吐き気を催す邪悪……！

俺はメリーの先輩とやらに復讐を誓った。

「無念……！　無念だ……ッ！」

『な、なんだか期待に添えなかったみたいですみません……』

「もういいけどさ……」

しょせん、俺は一般人なのだ。だいたい、霊力とかに目覚めても敵もおらんのにどうしろと。特に残念に思う必要もない。掌がぼーっと光ったから何だってんだ。蛍と似たようなもんだろ。そんな力、別にいらん。

……く、悔しくなんかないんだからね！

「……仕方がない、許してやろう」

『ありがとうございます……』

メリーの声はまだしゅんとしている。

俺はため息をつき、話をもとに戻した。

「で、なんの話だったっけ？」

『ええっと……あ、漫画のお話しをしてましたね』

「そういやそうだった。……俺、あの漫画まだ、読み切ってないんだよな。ちょっとだけ

先の展開を教えてくれよ」
『え、ええっ!?』
　と、メリーの反応がおかしい。
　そんなに変なことを言っただろうか。
「なんだよ、別にネタバレしてくれってんじゃないぜ？　ただちょっとだけ、アニメの次回予告みたいな感じに聞きたいんだよ。城之内が死なないレベルで」
『……じ、実はですね。まだ私も、読みきっていないのですよ』
「え？　さっき話してたとこまでしか読んでねーの？」
『そ、そうなのです。いやー、偶然ですね偶然。世の中には不思議がいっぱいです』
「おい、なんか怪しくね？」
『～♪』
　口笛を吹き出しやがった。しかも結構上手い。
　……怪しい。あからさまに怪しい。
　あのなんだろう、冷や汗のダラダラ垂れてそうな声からして、なにかしら後ろめたいことがあることはまず間違いない。暴かねば……！
　と、そこで俺は気がついた。
　俺が読んでいたのは、ちょっと前に連載終了した少年漫画である。であるからして当

然、最終巻が出版されてから結構時間が経っている。
普通、漫画ってやつは、週間で追っているか、単行本で一気読みしているかじゃないだろうか。それなのにまだ読みきってなく、偶然にも俺と同じところまでしか読んでないってことは、もしや……。
俺は片手で顔を隠して背中をそらし、バァァン！とポージングを決め、言い放った。
「メリー、貴様ッ！　『見て』いるな……ッ！」
『な……』
「次の瞬間、お前は『なんでそのことを知って……!?』と言う」
『なんでそのことを知って……!?　……はっ!?』
「「「「「「……！
勝ったな。そう確信させる擬音が（脳内で）響き始める。
俺はドヤ顔で解説を始めた。
「簡単な理屈だ……夏の日に靴下のニオイを嗅げば思わず顔をそむけたくなるのと同じくらい当然の理屈だ……もう完結している物語、それも完結してから時間のたっている物語を、わざわざ途中で読むのを止めている必要などない。それもちょうど、俺の読んでいるところまで！　そんなことがあるとすれば――そう！」
俺はビシィッ！と空中に指を突きつける。

「お前は俺とともに、『一緒に読んでいた』のだ……！　メリーさんとしての特殊能力、『千里眼』を使ってなァァーッ！　……何か申し開きがあるか？」
『そ、そのとおりです……』
　完全勝利である。
　俺はひとしきり高笑いをあげ、勝利感を楽しんだ後、メリーに理由を聞いた。
「で？　なんでそんなことを？」
『お、怒らないのですか？』
「いや別に、怒りやしねーよ。友達と一緒に漫画読むのとおんなじようなもんだしな。ただ、なんでわざわざってんのが気になるんだよ」
『友達……えへへ』
「メリー？」
『ひゃいっ!?　あ、いえ、その。すみません。……理由を言っても、笑いませんか？』
「笑わねーよ」
　促すと、メリーは恥ずかしげに理由を話した。
『あなたと、一緒に話せる話題が欲しかったのですよ。もっともっとお話ししたくて……』
　最後は消え入りそうな声だった。

……なんつーかな。
そう、これは、アレだ。……照れる。
「お、おう。まあ、そうか……」
『……そ、そうなのです』
沈黙。
……いや、だってさあ。俺とか彼女以前に友達すらいねえわけじゃん？　それがこの状況で、なんか気の利いたことを言えって？　無理に決まってんだろ。
と、どうしていいのかわからなくなっていたその時。俺はあることに気づいた。
「……んん？」
『どうされましたか？』
「いやいや、んー？　……ちょいと気づいたんだけどよ。お前、俺と一緒に他の漫画も読んでたんだろ？」
『え、ええ、はい。実は』
「ってことは、だ」
俺はやれやれと小さく肩を竦めた。
「お前も俺と一緒に、エロ本……あ、間違えた。芸術作品を読んでたってことだよな」
『へっ!?』

「メリー。先達としてここで一つ、アドバイスをやろう」
『な、何です……？』
「……自分を偽る必要はないぞ」
俺は菩薩のような顔でそう言い、頷いた。
なるほどな。ま、そういう年頃だ。
電話の向こうから『違います！』とか『そ、それはそういうのを読んでいる時は見ないように……！』とか雑音が聞こえるけど知らーらね。
「メリー、別に恥ずかしいことじゃないんだぜ？」
『あなたが恥ずかしいのです！』
「何を言っているんだメリー。俺は自然のエネルギーを感じ取るために部屋にいる時は常に全裸だぜ？　千里眼で漫画を読んでたってことは、当然のことながら一緒に俺の裸体も目に入れてたってことだろ。あーあーやだね。ったく、これだからむっつりしたヤツは困るんだ」
『う、嘘つかないでください！　服、いつも着てるじゃないですか！　今も！』
「フ……言葉ではなんとでも言えるよな……。俺の部屋の扉を開けるまでは本当に俺が全裸かどうかなんて分かんねえってのにな」
『その嘘をつくことでアキラさんに得があるのですか……!?　得るものは裸族の称号だ

けですよ!?』

「おいおい、そんなに必死になって誤魔化さなくてもいいだろ。大丈夫だ、俺の前では本当の自分をさらけ出していいんだ」

『だからー!』

その後ちょっとの間、メリーは口をきいてくれなかった。

１０にちめ　メリーさんと勝負。

『クイーンでそのポーンを撃破です』
「次でチェックか……フッ、甘い！　蜂蜜入りの紅茶のように甘いぜメリー！　ナメるな、その戦術は読みきっていた……！　キャスリング！」
『はい、じゃあこっちのプロモーションしたポーンでチェックです』
「はっ？　え、じゃあ……おい、詰んでんじゃねえかこれ」
『ええ、詰んでます。チェックメイトです』
　さて、メリーが千里眼を駆使することによって実現したこの電話越しのチェスなのだが……現在１２戦３勝９敗。俺はメリーに大きく負け越していた。
「クッソなんで勝てねえんだよ。不良品じゃねえのコレ」
『チェス盤と駒が不良品でも結果は変わりませんよ？』
「……チッ、こうなりゃしょうがない。メリー、あえて直接聞くが、俺の敗因はなんだ？」

不思議でならない。最初のうちは三回、立て続けに勝ったのだ。しかしそれ以来ぱったりと勝ち星がつかなくなり、このザマである。さっぱり理由がわからん。

『……いえ、その。本気で言ってます?』

「本気も本気だよ。その口ぶりじゃなんかあるみたいだな」

もったいぶった口調のメリーに急かすと、呆れ声で返された。

『だってアキラさん、毎回必ず、それも終盤にキャスリングするじゃないですか。勝ちそうになってても無意味にキャスリング、負けそうになっててもとりあえずキャスリング。そのせいで一手遅れますし、読みやすいですし、ルークとキングの動きがずっと制限されますし。……あの、キャスリングをやめたらどうですか?』

「はっ?　……はっ!?」

『いえ、キャスリングという戦術は、間違いなく有効な戦術なのです。でもですね、毎回やっていたらそれは戦術ではなくて、ただのルーチンなのですよ』

それに続けて俺の戦術にケチをつけるメリー。

俺はふぅ、と息を吐き出し、やれやれと肩を竦めた。

「メリー、メリーよ。お前は何にもわかっちゃいないな」

『えっと、何がです?』

「チェスにはな、キャスリング以上に格好いい戦法なんて存在しない」

『へっ？』
「いいかメリー、キャスリングってのはな、王に忠誠を誓った城が最後の最後、水際で王を守り通すために全力を振り絞った脱出劇なんだよ」
『王に忠誠を誓った城⁉　付喪神か何かですか⁉』
「そこに存在するのは、我が身を犠牲にしてでも王を守り通すという気高い誓いだ。ルークがハドラー様を消滅すら覚悟して守ったあの時から、キャスリングは俺の中で一番格好いい戦術なのさ」
『ああ……付喪神といえば付喪神ですね……』
　だから俺の我儘でキャスリングしないなんてことはありえないと言ったところ、メリーは『だったら勝ってる時はしなくていいのでは……？』とかなんとか言っていたが、関係ない。格好いいからにはやらねばならないのだ。
「が、まあ敗因はわかった。次はそれを逆手にとってやるよ。……次の勝負だ。勝ち逃げは許さんぞ」
『いいですけど。でも、罰ゲームを忘れてませんか？』
「お前、だんだん抜け目なくなってきたな……」
『間違いなくあなたのせいなのですよ……』
　チッと舌打ちを残し、中身を抜いたティッシュ箱からごそごそと紙切れを取り出す。

このティッシュ箱に入っているのは様々な罰ゲームが書かれた紙切れで、敗北したらこれを一枚引き、実行しなければならないのだ。

まあもちろん、そんなに厳しい内容なわけでもないのだが。俺と違ってメリーは外にいるわけだし。羞恥心を捨てれば実行にはそんなに苦労しないようなものばかりだ。

……だがまあ、向き不向きというのはあるもので。

個人的に地獄だったのは赤ちゃんプレイ（五分間）だ。父性を感じてみたいとか迂闊に考えて罰ゲームにしてしまったあの時の自分を殴り飛ばしたい。負けて赤ちゃんになりきらねばならない時のことも考えろ、と。

何が辛いって、メリーが微妙に楽しんでるのがわかってしまったのが逆にキツかった。自分の状況が客観視できてしまって、なんかもうほんとに泣きそうになった。アレはもうやりたくない。

人ってのは辛い経験を乗り越えながら成長していくのだ。

そんなことを虚ろな眼で考えながら紙切れを開くと、『阿波踊りしながら豆知識を一つ話す』というのが出てきた。

『これはまた誰も得をしない……』

「誰がこんなアホなもん書いたんだ」

『いえ、アキラさんですが』

そーですね。途中で罰ゲーム考えるのに飽きて適当に考えたのがダメだったんでしょうね。

仕方がないので立ち上がり、流麗な動きで阿波踊りを始めながら、豆知識を披露する。

話し出す寸前、俺の目が壁にかかる姿鏡を捉えた。そこに写っているのは、伴奏もないのにたった一人で一心不乱に踊るバカである。率直に言って死にたくなった。

「……では、明日役に立たない豆知識を話すとしようか。俺の専門分野からな」

『アキラさんの専門分野というだけで、少し先行き不安なのですが……どうぞ』

鋼っ……！　俺の精神力は鋼だっ……！

今だけはただひたすらに阿波踊れっ……！

自分を鼓舞しながら豆知識を披露する。

「メリーはブルマーという衣服を知っているか？　かつての日本で体操着として用いられていたアレだ」

『ええ、話には聞いたことがありますけど……』

「ならば話が早い。ブルマーってのは運動しやすく機能的な服として、ごくごく健全な目的から体操着に採用されたんだが、しかし『ブルセラ』なんていう言葉を生み出すほどに、少しばかり性的な視線を浴びてきた。何故だかわかるか？」

『その、なんといいますか……丈が短いからではないのですか？』

メリーのその答えに、俺は動きにこぶしをきかせながら頷く。
「そう。もちろんそれは一つの原因だろう。股下ですっぱりと布が切り取られたあの形状は、まるで神と悪魔の悪戯であるかのように、意図せざるとも仕方なしに太ももを大胆に露出してしまう。……その形状からして、そこに僅かながらも性的なものを感じるというのは、褒められたことではないにしても責められることでもないだろうな」
『あの、アキラさん？　もしや、ただブルマーについて語りたいだけなのでは？』
そのメリーの問いに、俺は美しいダンスフォルムを維持しながら首を振る。
「いやいやメリー、ここからが豆知識だ。そのブルマーだが、メリーよ。お前、あの衣服の起源を知っているか？」
『……体操着、ではないのですか？』
「残念、ハズレだ。……実はな、あのブルマーというやつ、元々は下着なんだよ」
『へー。……へっ？』
「ブルマーが開発された当時は、女性服ってのはかなり着づらいものだった。中世のドレスのコルセットやらを考えりゃわかると思うが、そもそも下着からしてやたら硬く重く、とてもじゃないが活動的に動ける服じゃない。女性は否応なしに、静かに過ごすことが求められていたわけだ。で、それじゃいかんということで代わりに作られた下着がブルマーなのさ」

『そ、そうなのですか？』
「そうだ。まあつっても、当時のブルマーってのは今の短いやつじゃなくて、膝くらいまで丈があったらしいし、もう少しゆとりのある設計だったらしい。だから、今のブルマーの起源がそのまま下着かと言ったらちょっと違う気もするけどな。が、まあ、源流の一つは間違いなく下着だったわけだ。……つまりメリー、俺の言いたいことがわかるか？」
『……うっすらとわかりますが言いたくありません』
「ならば仕方がない。俺が言うとしようか」
　俺は阿波踊りをフィニッシュし、結論を述べた。
「ブルマーは元々下着だった。だったら、ちょっとくらいエロく見えるのはそりゃ当たり前だよな、って話だ。……以上、豆知識だ」
『わー。本当になんの役にもたちません』
「そりゃ、豆知識だしな」
『それはそうですけれども。というかアキラさん、これが専門なのですか……？』
　戦慄したようなメリーの言葉を無視し、チェス盤に向き合う。
「さ、次の勝負だ。まだまだ罰ゲームはたくさんある。メリーも次が年貢の納めどきだぜ」

『さっきもその前もそんなことを言っていた気がするのですが……いいでしょう』
かちゃかちゃと駒を元の位置に戻しながら、ふと、何の気なしにメリーに聞いてみる。
「……そういやメリー」
『なんですか？』
「今日で確か、長崎を出発して何日目だっけか？」
毎日毎日メリーと電話して会話しているので時間感覚が消失しているが、もう結構な日数が経った気がする。
メリーは電話越しに『いち、にー、さん、し……』と指折り数え、その結果を告げた。
『これで十日目ですね』
「マジか。もうそんなか」
十日。一週間＋三日。一ヶ月の三分の一。
そりゃもちろん一生のうちからしてみればなんてことない期間だが、しかし体感からしてみりゃ結構な時間だ。
特にメリーなんぞはその期間中、毎日歩いているわけで。
よくぞこうも元気に、俺と電話する余裕があるもんだ。
「で、今どこなんだ？」
『今ですか？　そうですねー』

ちょっとチェス駒並べを中断し、適当に考えてみる。
メリーの歩くのが時速三キロとして、一日十時間くらい歩くとして……十日だと三百キロか。そう数字にして予想を弾き出してみると、とんでもない。とてもじゃないが女の子の歩く距離じゃないだろう。
「……だいたい、山口ってとこか？」
関門海峡をどうやって越えたのだろうか。ああいや、アレって確か、徒歩でも渡れるんだっけか……？
とまあ、俺の予想はだいたいそんなもんだったのだが。
『いえいえ。そろそろ神戸駅に着くと思いますよ？』
「はぁっ!?」
――その予想は、見事に外れていた。
驚きで、せっかく並べ終わりそうだった駒が軒並み倒れる。
「はっ？　お前、えっ？　神戸？」
『はい、神戸ですけど……どうしたのです？　あっ、神戸ポートタワーです！　記念写真でも送りましょうか？』
「お、おう……」
『わかりました！　ではでは～』

そう言い残して数分後、送られてきたのは、確かに神戸ポートタワーをバックに写っているメリーである。

案の定目元は隠されているものの、見間違えるということもありえまい。

狐につままれたような気分だった。

『よく撮れてますか？』

「あ、ああ。よく撮れてるけどよ……。え？　なんで？　なんでお前、神戸にいんの？」

再びかかってきた電話に、驚きの声を返す。

だって、どう考えてもおかしいだろう。俺の予想と比べればざっと二倍以上。ターボババアやらなんやらについて語っていたメリーの口ぶりからすると、俺の予想したメリーの歩く速度にはそんなに違いがないはずで……。

『？　いえ、それはだいたいそんなものですよ。だって私、一日に七十キロほど移動してますし』

「おい、まさかとは思うが……お前、一日中移動してんの？」

『ええ、はい。それはもう二十四時間営業年中無休です。……ど、どうしたのですか？』

呆然に、ぽかーんとアホみたいに口を開ける。

一日？　２４時間？　１４４０分？　８６４００秒？

「に、二十四時間ってお前……睡眠時間は!?」

『わっ！　きゅ、急に大きな声を出さないでください……！』
「あ、ああ、すまん……」
『ええと、睡眠ですか？　必要ないのですよ。私はこれでも怪異ですから』
……いやはや、全く。
俺にしても、メリーが都市伝説だということは理解していたのだ。が、普通に会話ができて普通に遊んでるから、そんな意識がどこかに吹っ飛んでしまっていたらしい。理解と実感は別物というか、そっか、そうだよな。怪異だもんな、そっかー……。
遠い目をする俺の様子に気づいたのか、メリーが慌てて声を出す。
『……その。……引きますか？』
……引く、か。ふむ。
改めてそう問われてみると……別にそんなでもないか。
「いや、そういうわけじゃねーんだけどな。単純にびっくりしただけだ」
『そ、そうですか……？』
「ああ。要するにアレだろ？　イルカやらマグロやらが半分眠りながらも泳ぎ続けるようなもんだろ？　メリーさん＝魚介類と考えれば、そこまで無茶苦茶なこと言ってるわけでもねーよ」
『魚介類っ!?　そっちのほうが無茶苦茶ですよ!?』

「肺魚みたいなもんだろ」
『メ、メリーさんのイメージが……！』
……しかし、そうか。
俺みたいな普通人は一日に八時間、三分の一くらいは寝て過ごしてるわけだ。
それでもちょくちょく退屈を感じることがあるんだから、俺よりも長い一日を過ごすメリーはもっと退屈だろう。メリーが俺と長く話したがるのには、そういう退屈さを紛らわす意味もあるのかもしれない。
と、ふと気づいたことがあって、『肺魚……』と呟いているメリーに声をかける。
「……そういやこの写真」
『ひゃっ！　……は、はいなんでしょう？』
「お前、日焼けしねーのな」
思い返してみると、メリーの写真は初めてメリーから電話がかかってきた時に見た写真と同じ、真っ白の肌だった。この炎天下を、十日間も歩いてるってのにだ。
『あ、はい。メリーさんという怪異は人形がベースですので、日焼けはしないのです。……というかそれ以前に、怪異ですから肉体的な傷はすぐさま治るのですが』
「え？　怪異って物理攻撃無効なのか？　じゃあどうやって祓えばいいんだよ」
『祓う気なのですか!?　私、祓われてしまうのですか!?』

「ああいや、そういうわけじゃないんだけどな。参考までに」
　そう聞くと、メリーは投げやりな声で言った。
『たぶん塩とかじゃないですか？　一キロ二百円くらいの』
「おい、クッソ適当だな」
『いえ、だって知りませんし。一時的に祓うのは別として、都市伝説が本質的に滅びるのは、人から忘れ去られた時ですから』
「あー、なるほど。ある意味、儚い奴らだな」
　強いのか弱いのかよくわからん。
　……となると。
「『紫の鏡』とかはどうなんだ？　アレはある意味、忘れられることが本質みたいな都市伝説だろ？」
『ああ、紫の鏡さんですか。自己矛盾に苦しんで、毎年成人式ごろは胃が痛いそうです』
「不憫な……」
　鏡の胃ってどこだろうな。
　他にも案外、闇を抱えている都市伝説がいそうだ。
「ま、とにかく。お前が俺のとこまで来るのが、案外遠い未来じゃないってことはわかった。……となると、だ」

『？　はい？』
「お前、俺の所に来てどうするつもりなの？」
そう。そういえば俺は、メリーが俺の所に来て何をするつもりなのか、一度も聞いていなかったのだ。……毎日いっしょに遊んでて、楽しかったからな。
『どう、とは？』
「いや、メリーさんってやつは大抵、『あなたの後ろにいます』で終了だろ。その後ってどうなるんだ？　……もしかして、殺されたりすんの？」
『し、しませんしませんしません！　何を言っているのですか！　ありえないです！』
「じゃ、どうすんの？」
『そ、それは……』
メリーが口籠もった。
背筋にたらりと冷や汗が垂れるのを自覚する。おいおい、ここで口籠もるってのは、まさか本当に……？
「お、おい。メリー、まさか……」
『いえ、その。……私も、知らないのですよ』
「……はい？」
そのメリーの言葉に、俺はぽかんと口を開ける。

『し、仕方がないじゃないですか！　だって私、まだメリーさん見習いなのですから！』
「……いや、その理屈はおかしい。メリーさん見習いでも、メリーさんの仕事くらいは知ってるだろ」
『いえ、違うのです。メリーさんというのは、振り向く所で終わる怪異なのです』
「……どういうことだ？」
俺は首を傾げた。
そりゃそうだろう。メリーさんが振り向く所で終了する都市伝説だってのはわかる。だからってなんで、振り向いた後を知らないんだ？
『いいですか。メリーさんというのは、振り向いた後に何が起こるのかわからないからこそ、都市伝説として今なお有名なのですよ』
「……んん？」
『もし、もしですよ？　仮にメリーさんが、振り返ったと同時に相手を殺す怪異だとしましょう。その場合、そもそも破綻しているのです』
「なんで？」
『だって、誰がその都市伝説を伝えるのですか』
「……あー」
『メリーさんという怪異は、結末を定めてはならない怪異なのです。結末が定まらない

からこそ、これまで都市伝説として生き残ってこれました。……ですから、全てはケースバイケースなのですよ』

「そういうもんなのか？」

『そういうものなのです。怪異にとっての人間は、商売に例えればお客様ですから。口裂け女さんなんかは武闘派で有名ですが、その代わりに対抗手段も有名でしょう？　ヘタに人間に手を出しても得がないので、問答無用で害を与える都市伝説というのは実はそんなにないのですよ』

要するに、ターゲットが振り向いた時点で都市伝説としては終了。その後に何があろうと、そんなのはその時のメリーさんの気分次第ってことか。まあある意味、当たり前っちゃ当たり前なのかもしれないが……。

でもなー。なんかすっきりとしない。

思いついたことを提案してみる。

「……じゃあ、先輩とやらはどうしてんだ？」

『先輩、ですか？』

「ああ。お前が見習いだってことは、必然的に現役もいるってことだろ？　ちょっと興味あるし、実際どんなふうにしてるのか聞いてみようぜ」

俺のその提案に、メリーは興味を示した様子だった。

『おおー！　ナイスアイデアです！　早速メールで聞いてみます！』
「あ、現役のメリーさんはメールなのか……」
　メリーが使ってるのは無料通話アプリなのにな。これが世代間ギャップってやつか。
　数分して、メリーから再び電話がかかってきた。
「メリー、もう連絡ついたのか？　速いな」
『電話は商売道具ですから。メリーさんでしたら、必ずチェックを欠かしません。……ええと、そのまま読み上げますね？』
「おう、頼む」
　メリーは画面をスクロールしながら、スマートフォンのマイクに向かって読み上げている様子だった。
『ええと……【メリー、そこに興味を持つとはどうやら、見習い卒業も近いようですね。先輩として嬉しく思います】……えへへ。やったあ、褒められちゃいました！』
「はいはいすごいな。続きは？」
『もう少し喜んでくださいよ。……では読み上げますね？　【あくまでも私の場合の例ですから、あまりここに挙げたことに拘泥しすぎないようにしてください。その一、財布を奪って逃走する】』
「ただのコソ泥じゃねーか！」

先輩っぽいこと言ってんなと思ったら台無しだ。
拘泥しすぎるなっつーか、こんなもんメリーに参考にして欲しくない。
『そ、その！　きっと、なんらかの理由があるのだと思います！　ええと、続きは……！
……【その二、股間を蹴り上げて逃走する】』
「確定だよ！　その先輩メリーさん、ただの性悪だよ！」
『え、えっと、えっと！　……【その一とその二は、主にムカつく相手だった時に使用する手段です。合わせ技も可。背後からの奇襲なので、成功率は１００％です】』
「タチ悪っ！　ド畜生だな！」
こんなんただの通り魔だろ。
メリーもそう感じているのだろう、慌てて続きを読んだ。
『こ、これだけではないはずです！　……【その三、気配を消して逃走する。相手がヤーさんだったり超怖い人だった時は、この手段を選択することをお勧めします】』
「擁護の隙がないクズっぷりだぜ！」
怖い相手だったら逃げるとか、なんのための物理攻撃無効だ。
もはや俺のメリーさん像はガラガラに崩れ去っている。
『……あっ！　これは大丈夫です！　【その四、相手が子供の場合は、飴ちゃんをあげて頭を撫でて立ち去る】』

「露骨に好感度を稼ぎにきたな……」

……だが。これはまあ、いいんじゃないだろうか。

ほだされたわけじゃないが、子供に優しいってのは大きな美点だ。別にメリーさんも純度１００％のクズじゃなく、不良で言えば雨の日に子犬を拾うタイプの不良だった。

つまりはきっと、そういうことなのだろう……。

『……【その五、相手がこっちに見惚れているようだったら飯を奢らせて、タクシー代を貰って速やかに立ち去る（※その後、連絡を取らないように注意すること）】』

「だよな！　なんか逆に安心したわ！」

この上げた評価を地の底まで堕としていくスタイル、嫌いじゃない。一周回ってクズっぷりが清々しくなってきた。

メリーの声はしょげかえっている。

『つ、次が最後のようです。……【その六、相手が好みのタイプだった場合は、その後めちゃくちゃセッ】……!?』

メリーの声は途切れ、電話の向こうから『はわわわわわ……！』とか『ど、ど、どうしたら……!?』とか聞こえてくる。

きっかり三分の後、メリーは言った。

『そ、その六。気に入った相手でしたら、よ、夜のスポーツをするそうです……』

「もうはっきりと言えや！」
なんだその中途半端な意訳。
逆になんかエロいわ！
「とりあえずメリー、お前は現役のメリーさんに替われ」
『ア、アキラさん!?　そ、そういうのは良くないと思います！　だいたいアキラさんなんて先輩が相手にするはずがありません！　で、ですから。その、わ、わ、わた……』
「お前は十年歳取ってから来い。ロリには興味ねえ」
『アキラさんのバカーっ！』
続いてプツンと通話が切れる。
次の日のメリーはちょっと、怒っているのだった。

１４にちめ　メリーさんと過去。

「一、二、三、四で……『結婚詐欺師を開業。すぐ捕まり罰金１０００００００$』。……順調に破産まっしぐらだぜ！」
『むむむ……巻き返しにいきます。ルーレットを！』
「オーケー」
カララララッ。
安っぽいルーレットの回転音とともに、数字が示される。
「六だな。つーことは……『子供が生まれた。ご祝儀を貰う』。ざまぁ！」
『またですか!?　私はいったい、このゲームで何人子供を生んでいるのですか!?』
「これで五人だな。いやぁ、幸せな家庭を築いているようで羨ましいぜ」
『くぅ……！』
悔しそうなメリーの声である。
ここ二日ほど、俺たちは人生ゲームで遊んでいた。とはいっても、その辺のドラッグ

ストアで買ったちゃっちいやつなのだが。しかし案外、これでなかなか良くできていて、ちゃんとルーレットはついているしマップは長いしで、割合に長く楽しめていた。
『アキラさん、ルールを変えた途端に強すぎなのですよ……』
「いや、本当になんでだろうな。俺の本能が破滅に惹かれているのかもしれない」
『それはただのダメ人間というのですよ』
メリーのふてくされたような声に、俺はチッチッチ、と指を左右に振る。
甘い、甘いなメリー。
「幸せだけが人生じゃない。不幸も噛み締めながら積み重ねるのが人生ってやつなのさ」
『いえ、このゲーム上においてのアキラさんの人生は悲惨どころではないのですが……』
まあ確かに、今回の俺は生まれてすぐに家が破産、親の借金を一身に背負い大学へ進むも火事で家が丸焼け、全ての財産を失い株に賭けるも世界同時不況で値段が乱高下、追証発生。最後の手段として結婚詐欺に手を染めるもすぐに捕まっている。……ちょっとどうかしてるレベルで不幸だな。
だがしかし、ゆえにこそ強いのである。なぜならこれはただの人生ゲームではない。
「悲惨であればあれほど強いのさ、この『没落人生ゲーム』においてはな……！」
『威張ることなのですか……？』

没落人生ゲーム。

そのルールは単純である。総資産をできる限り減らす、ただそれだけだ。

しかし、なぜか俺は通常ルールからこのルールに変更したとたん、無類の強さを誇っていた。通常ルールでは常にメリーに負けていたのが、この特別ルールを適用してからは全勝だ。常に負け組人生一直線である。

……もしかして俺には貧乏神でも憑いているのだろうか。

聞いてみると、メリーは微妙な答えを返す。

『ううん、どうなのでしょうか。確かにアキラさんは貧乏神が憑くにふさわしい資質を備えていますが……』

「マジで!?」

『はい。笑う門には福来るといいますが、その反対に貧乏神などの禍に分類される存在は、じめっとした人を選ぶのですよ』

「俺、じめっとしてんのか……」

なんてナチュラルな罵倒だ。

くじけそうになっていると、メリーから慌てたようにフォローが入る。

『あっ、違うのですよ!?　性格的にということではなく！　……その、生来的な気風として異形や魔性を引き寄せやすい方というのがいらっしゃいますから。アキラさんはだ

いたいそんな感じです』
だいたいそんな感じって。
「いや俺、幽霊とか見たこともねーけど？」
『私を引き寄せてますよ？』
「ああ、なる」
そういやそうだった。どうしても、メリーは怪異ってよりはただの女の子みたいに思ってしまうんだよな。毎日いっしょに遊んでいるからだろうか。……つってもまあ、この時間もあと半月くらいの話なんだろうけどさ。
と、ふと気になったことを聞いてみる。
「……あれ、ちょっと待て。じゃあもしかして、俺に友達がいねえのって」
『あ、それはただの性格的な問題です』
「即答かよ！」
魔を引き寄せるこの忌まわしき肉体が他人を拒絶してしまうのだ……という超絶カッコいい設定からの魔を狩る美少女陰陽師との出会い、誤解による敵対、第三者組織に対する共闘によるルート確定、事実を知りすぎ組織を抜けた彼女を守るための暗闘、危機によって深まる絆、高笑いするラスボス、そして感動のラストという超大編の七割くらいまで想像できてたのに。

俺はふてくされながらメリーに聞いた。
「んで？　なんで貧乏神が憑いてるか微妙なの？」
『貧乏神は都市伝説ではなく信仰のカテゴリの存在ですから。私からは千里眼をもってしても、気配を捉えきれないのですよ』
「都市伝説ってなんかアレだよな、やたらカテゴライズがガチガチでお役所仕事的な融通の利かなさあるよな……」
『信仰カテゴリや伝承カテゴリの方々と違って、私たち都市伝説は『都市』というだけあってニューカマーですから。おおらかではやっていけないのです』
信仰とか伝承とかのカテゴリと確執でもありそうな口ぶりである。
世知辛い世の中だ。そんなことを思いながら俺はルーレットを回し、ゴールした。
『……あっ!?』
「お先っと。……所持金は約束手形１３５０００$だな」
『全て踏み倒しましたね……』
とんでもない額の不良債権を残してこの世を去って行ったに違いない。
メリーのぶんのルーレットを回しながら資産が雪だるま式に増えていくのを眺める。
このぶんだとメリーは、最終的に大富豪としてゴールしそうだった。
『むう……』

メリーはむくれている。

おそらくは先ほどの罰ゲームが尾を引いているのだろう。いやあ、良かったなアレは。五分間ただひたすらに相手を褒め続けるという罰ゲームは。

どうやらメリーは演技がむちゃくちゃ上手いみたいで、ちょっと照れを混ぜながらも一つ一つ俺の知らない俺のいいところを挙げてくれるものだから、てっきりメリーは俺のことが好きなんじゃないかなんて思ったが、五分間終了した後に『う、嘘です。全部嘘です、私はアキラさんのいいところなんて一つも知らないのです。……ほ、本当ですよ？　本当に別に、私は思ったことをそのまま言ったりなんてしていないのですよ？』なんて言ってくれやがるものだから全然そんなことはなかったぜ！

……まあ全部嘘ってのは悲しい話だが、それはそれとして全肯定されるという得難い経験はなかなか素晴らしいものだった。罰ゲームはまたあんな感じのやつを引けないものだろうか。

俺は前髪をファサッとかきあげてから言った。

「諦めろ。お前の敗北は既に決定している」

『む、むむ……！　……確かに、そうみたいです』

「おいおいしょんぼりすんなよ、負けた時こそ笑うんだぜ？」

『そうですけど。そうですけどー』

「ったく、そんなに罰ゲームが嫌なのか？」
『嫌といいますか、またあんなのがきてしまったら本心が漏……い、いえっ！　そうなのです！　罰ゲーム断固反対なのです！　自由意志を無視した横暴な取り決めなんて、破棄されてしかるべきなのです！』
「昨日まで全部実行してきた俺をなんだと思ってんだ……？」
『うっ』
　電話の向こうでサッと目を逸らすような気配を感じる。
　俺はふぅ、とため息をついた。
　……まあ、俺も鬼じゃない。そりゃまあ、メリーを罰ゲームで俺にかしずかせたりちょっと恥ずかしいことを言わせたいという欲望はある。大いにある。非常にある。けれどもやっぱり、だからこそここであえて罰ゲームを寛大な心で赦すことで、大人の包容力を見せつけることができるんじゃないだろうか。
　ということで俺はメリーに寛大さを見せつけるために、あることを提案した。
「メリー、今回だけは罰ゲーム免除にしてやってもいいぞ」
『えっ、本当ですか？』
「ただし条件がある」
『……なんでしょう、ロクなものな気がしません』

「おいおいメリー、思い返してみろ。俺がお前に、一度だって理不尽なことを言ったり嘘をついたことがあったか？」
『たくさんありすぎて言いきれませ……』
「いやー、そうだよな。全然記憶にないよな。こうして思い返してみると、まったく俺ってやつはどれだけ健全で心穏やかで思いやりに溢れる人付き合いのいい好青年なんだよ……。自分で自分が恐ろしいぜ」
『嘘つきー！　ここに嘘つきがいます！』
　メリーの糾弾を無視して、俺は条件を提示した。
「お前の写真、撮って送ってくれないか？」
『……写真、ですか？　……え、えっちなの、とか』
「違ぇよ！　お前は俺をなんだと思ってんだ」
『変態さんですか？』
　うーむ、この口調はアレだ。ただ純粋に俺のことを変態だと思っている口調だ。
　一度メリーとは、じっくりと話し合う機会が必要だろう。
「……いやその、記念にと思ってさ」
『へっ？』
　が、まあ今回は……おおっと間違えた。今回もゲスな下心がなかったので普通に理由

を言うと、メリーはちょっと驚いたような声を出した。
「その、なんだ。お前はどうしたっていつかは俺のところについて、メリーさんになっちゃうわけだろ？　そうすりゃこうしてだらだら電話で遊ぶこともできねえし、寂しいだろ。……だからこの夏の記念に、お前の写真がもっと欲しいなと思ったんだよ」
『アキラさん……』
「か、勘違いすんじゃねーぞ！　俺はただ美少女の写真が欲しいだけなんだからな！」
『アキラさん。今、真剣に嬉しかったので割と本気で『この人なら本当にそうなのかもしれない』と思えてしまうことを言わないでください』
「あっハイ」
『ちょっとだけ、待っててくださいね？』
少しだけの時間を空けて送られてきた写真は、いつもの自撮りじゃなかった。
大きく広がる夕焼けの空をバックにして映る少女は、夕日で全身を紅に染めている。
壊れそうに細い、小さなシルエットに、頭を覆う麦わら帽子。
顔そのものは逆光で見えない。が、俺にはその少女が微笑んでいるのがわかった。
だって、こんなに穏やかで静かで、見ていて心地いい写真なんだ。そうに決まってる。
『……いかがですか？』
「最高」

『そ、そうですか……』
かかってきた電話に率直な感想を返すと、メリーは照れたように声を小さくする。
……だって、いいもんはいいもんだろ。褒めるのも仕方がない。
「誰かに撮ってもらったのか？」
『はい、その辺を散歩していたおじいさんに撮ってもらいました。……本当はあんまり、都市伝説がターゲット以外に接触するのはよくないのですけど』
でも、それでもきちんと写真を撮りたかったから、とメリーは言う。
「……大切にするぜ。こっちきたら一緒に撮ろうな」
『はい、もちろん。世にも奇妙な心霊写真になること請け合いです』
「とんでもねえことを請け合いにされたな……」
心霊写真確定ってなあ……。
まあそれを言えば、これだって心霊写真みたいなもんなのかもしれないが。
ちょっとの間、写真を眺め続けて沈黙が空く。
気まずいわけでもなくて喋ることがないわけでもなくて、喋らなくても十分だから喋らない。……なんというか、メリーはこの夏休みを通して硬さが取れていい意味で適当になってきたが、俺は俺で適当すぎが治り、少しくらいは空気ってヤツが読めるようになっているのかもしれない。

そんなことを考えて写真を眺めているうちに、俺はあることに気づいた。
「メリー、ちょっといいか？」
『あ、はい。なんですか？』
「お前の服なんだけどさ……なんでワンピースなんだ？」
『変、ですか？』
「いや、めちゃくちゃ似合ってるけどよ」
いかにも夏って感じの服装で、さらさらした黒髪で華奢な少女のメリーにはよく似合っている。それはもう間違いなく似合ってはいる、の、だが。
「メリーさんって西洋人形が元なんだろ？　だったらドレスとかじゃねえの？」
『変なところにこだわりますね。だってドレスだと暑いじゃないですか』
……。
都市伝説の生態、本当に分かんねえ……。
いやまあ分かる。分かるんだ。確かに暑いだろう。暑いに決まっている。
でも、なんでこんなに釈然としないんだろうな……。
妙なところで尺度が人間的なんだよな、都市伝説。そりゃ人間の想像から生み出されたってんなら当たり前っちゃ当たり前なのかもしれんが。
一応のこと、補足らしきものはあった。

『もちろん、メリーさんという怪異の特性あってのことではありますが。メリーさんという怪異は本来、終了するまでターゲットに姿を見られることがないので、別にどんな格好をしていてもメリーさんとしてのイメージが崩れないのですよ』
「迷彩服でも？」
『はい、迷彩服でも』
「和服でも？」
『もちろん和服でも』
「メイド服でも？」
『おそらくメイド服でも』
「水着でも？」
『きっと水着でも』
「じゃあ俺のところには水着で来てくれ」
『そうですね水着で……行きませんよ!?　何を流れるような誘導で私に水着姿で公道を歩かせようとしているのですか!?』
「……え？」
『なんて純粋な疑問の表情!?　意識的にではなく無意識のうちに溢れでた欲望だったのですか!?　やだ怖い、この人怖いです！』

戦慄するメリー。

いやいや、別にやましい気持ちがあるわけじゃない。俺はそれを証明するために、誠実な口調でメリーに話しかけた。

「いや、もちろん冗談だぜ？」

『冗談に聞こえなかったのですが……』

「本当に冗談だ。別に俺はメリーに旧スクを着てきてほしいなんて思ってないしな」

『細分化してる!?　……一応言っておきますが、着ませんよ？　着ませんからね？』

「麦わら帽子とスクール水着の組み合わせって尊いよな……」

『絶対に着せる気でいますよね!?』

……おっと、少しばかり心の声が漏れてしまったようだった。

警戒を解くために話の矛先を変える。

「……ところでメリー、話は戻るがなんでお前はワンピースを着ているんだ？」

『……？　どういうことですか？』

「いや、だからさ。メリーさんが何を着ててもメリーさんとして成立するってんなら、逆に言えばわざわざワンピースを着てることにはなんかの意味があるってこったろ？」

『ああ、そういうことですか』

メリーは、さらりと理由を言った。

『前のターゲットの方の趣味です』
「……ぐはっ！」
ばたん、と倒れる。
電話口からは『アキラさん!?　アキラさーん!?』という声が聞こえるが、なんか立ち上がれない。
……これは何だろうな、こうさあ、仲のいいと思ってる友達と遊んでたら急に自分の知らない友達との思い出話をされて『そいつが親友なんだ』って言われた時のような感覚。いや俺、友達いないしいたこともないんだけど。
あるいはどきどきしながらほのかに憧れてた初恋の女の子がもうとっくにイケメンの彼氏と付き合っていた時のような感覚。いや俺、初恋の相手以前にそもそも誰かに恋したことがないからそんな経験ないけど。
それとも他にちょっとわかりやすく言ってみれば、妹が彼氏を連れてきたみたいな感覚だろうか。……あ、やばい、死ぬる……。
『アキラさん!?　しっかりしてください！』
「……あ、ああ、大丈夫。お、お幸せにな……」
『何がなのですか!?』
さようなら現世、フォーエバー俺。

なんかよくわからんがそんな感じだ。
そのまま力尽きようとすると、電話口から何やら、慌てたような声が聞こえた。
『……ど、ど、どうすれば……!?　どうしておじいちゃんの話をしたらアキラさんが倒れるのです……!?』
……おじいちゃん？
むくっと立ち上がってメリーに聞く。
「おじいちゃんって誰だよ」
『わわっ、聞いていたのですか!?　……前の私のターゲットの方ですよ。その頃の私はまだ千里眼も持っていなくて名前がわからなかったので、いまだにおじいちゃんと呼ばせてもらっているのです』
「……おじいちゃんはワンピースが好きなのか？」
『いえ、好きといいますか……お孫さんを思い出すだとか』
ちょっと想像してみる。
夏。白いワンピース。麦わら帽子。涼やかな丁寧語。
俺はポン、と手を打った。
……孫娘だ。これ、夏休みに田舎に訪ねてきた孫娘だ。
正確に言えば、そういうシチュエーションで孫娘にしたい女の子だ。

『あ、あれ？　アキラさん元気になりました？　というよりも、なぜしたり顔でそんなに頷いていらっしゃるのです？』
「メリー、お前の前のターゲットさん、いい趣味してやがるよ……いっしょにうまい酒が飲めそうだ」
『は、はあ……』
　人ってやつはこうして、直接顔を合わせなくても人と人とのつながりを介して相互理解を深め合うことのできる生き物なのだ。人間って素晴らしい。
『よくわかりませんが、ともかくそういった理由でして。だから私はワンピース姿なのですよ』
「なるほどな。……ってことはもしかしてだ。俺がイメージすれば、お前の服装を変えることができるのか？」
　想像してみる。
　落ち着いた長めの袖と襟付きの服で良家のお嬢様風メリー。団扇を片手に浴衣を着て花火を見る幼馴染風メリー。ちょっとスカーフを緩めて夏の季節を乗り切ろうとするセーラー服メリー。シンプルなシャツとスカートに眼鏡で優等生風メリー。【自主規制】で【自主規制】な格好をした【自主規制】メリー。
　……素晴らしい。

『やめてください。本当に危険を感じるのでやめてください。……まあ、おそらく無理だと思うのですが』
「なんでだよ」
　アレか、霊力が足らんのか。
　そう聞くと、メリーはちょっと恥ずかしげに答えた。
『今では状況が違いますから。あの時の私はまだ、今のメリーさん見習いですらなかったのです』
「……メリーさん見習い見習い？　マトリョーシカみたいだな」
『ええと、確かにそうも言えるのですが微妙に違っていて……少しお時間もらって、話させてもらってもいいですか？』
「そりゃ願ったりかなったりだ」
　メリーがこれまで何をしていたかというのには興味が湧く。
　了承すると、メリーは静かに話し始めるのだった。

『……ええとまず、大前提として私は、そもそもメリーさん見習いとしてこの世に生み出

されたわけではないのです』
「だから、メリーさん見習い見習いだったんだろ？」
そう聞くと、電話の向こうで首を振る気配がする。
『いいえ、そうではないのです。……そもそもアキラさん、私以外にメリーさん見習いという怪異を聞いたことがありますか？』
「そりゃ……ないな。だってメリーさんはメリーさんだろ。そもそも怪異に見習いとか聞いたことが……ちょっと待て、おかしくないか？」
だってメリーの説明からしたら、怪異とは人々の想像から生み出されるものなんじゃなかったか？　メリーさん見習いなんて怪異が人々に知られていない以上、そんな怪異が存在しているはずがない。
『ええ、そうなのです。本来、メリーさん見習いという怪異は存在しません』
「じゃ、お前は何なんだよ。そう言ってるだけの一般人？」
ふむ。俺はずっとこいつのことを怪異だと思っていたのだが、実際のところはどうやら怪異ではなく、根性と気合いでメリーさん見習いというイメージプレイに挑み続けるただの人間、求道者だったようだ。
感銘を受けて頷いていると、電話の向こうからメリーの慌てたような声が聞こえた。
『妙な結論に落ち着かないでください！　まだ話の序盤ですから！　……こ、こほん。

えーとですね、私という存在はもともと、形のない想像で作られていました』
「……形のない想像？」
『ええ。……ちょっとした質問なのですが、時々、無性に怖くなることがありませんか？
わけもわからずに気分が悪くなって、とてつもない不安に襲われることがないですか？』
「……まあ、無いとは言わんわな」
妹からは散々に楽天的だといわれる俺だが、それでも時々そんな気分になることはある。だってそりゃ、人間なんてそんなもんだろ。誰だって確実が存在しないことなんて知っているし、絶対がありえないことも理解している。
不安と恐怖は人間の友じゃなくとも、間違いなく隣人なのだ。
だいたいそんなことを言うと、メリーは頷いたようだった。
『ええ、たいていの人はそうだと思います。……私はつまり、そこから生み出された、名前のない都市伝説……あえて言うなれば【漠然とした恐怖】でしょうか。その一部をもととしています』
「……とてもじゃないがメリーさんにつながりそうもないな」
そこからいったい、どうやればメリーさんにコンバートできるというのか。
そんなことを考えて唸っていると、メリーはちょっと驚いたように言う。

『……あの、いいのですか？』
「何が？」
『いえその、アキラさんは優しい人ですから。私のもともとがそんな存在でも一線を引くことはないだろうとわかっていました。ですけど、さすがにそこまで無反応にされてしまいますと、勇気を出して話した私の立場が……』
「めんどくさっ！」
少女漫画の駆け引きじゃねえんだからそんな微妙な感情とか知るかよ。
そう言うとメリーはちょっと不満げに、しかしどこか嬉しげに言う。
『都市伝説の苦悩を面倒くさいの一言で済ませないでほしいのですよ、まったくもう。……話を戻しますと、この【漠然とした恐怖】という都市伝説には定まった形がありません』
「まあそりゃ、『漠然とした』だもんな」
『はい、その通りです。……そしてこの【漠然とした恐怖】というのはありとあらゆる分野に薄くヴェールをかけるように存在しています。例えば暗闇の中、例えば夜の中、例えば鏡の中、そして例えば……』
「……電話回線の中、ってか？」
『正解です』

……なるほど、話が見えてきた。

「つまりお前は電話回線の中で、その【漠然とした恐怖】ってのをやってた。そこにたまたま本職のメリーさんが通りかかって人手が足りないって理由でスカウトされ……」

『違います』

バッサリだった。

『都市伝説とは人の手で作り上げられるものなのです。それでは都市伝説が都市伝説を作り上げるという本末転倒な事態を引き起こしてしまいます』

「……じゃあ、なんだよ」

俺のふてくされ気味の言葉に、メリーは静かな声で答える。

『ある日のこと、私に……いえ、『私の素』ですね。そこに電話がかかってきました』

「……なんで電話番号があるんだ？」

『ただの電話番号ではありません。その持ち主が既にこの世にいない、破棄されたはずの番号……つまりそこにかけても、誰かが応答してくること自体がありえない番号だったのです。ようするにその電話番号自体が、都市伝説の素となりうる性質を備えていたのですよ。……私はそのとき、相手に向かって【漠然とした恐怖】として何かを言いました。何を言ったのかは覚えていません。【漠然とした恐怖】に自我はほとんどありませんから。……本来ならそこで終了するはずでした。けれども電話の向こうの相手は、

こう聞いてきたのです。『メリーさんかい？』と』

「ああ……つまり」

今度こそは話が見えてきた。

『はい。……その瞬間に私は、『メリーさんに間違えられる存在』としての自我を得ました。【漠然とした恐怖】から分離し、一個の都市伝説の種子としての核を得たのです』

「で、メリーさん見習いってわけか」

『そうです。あくまでも私はメリーさんではなく『メリーさん未満』でしたから、ふさわしい言葉でしょう？　……もっとも、その呼び方をくださったのもその相手の方だったのですが』

「それが『おじいちゃん』か」

そう言うとメリーは、懐かしむような声に変わった。

『……ええ、穏やかな人でした。私をメリーさんかと呼んだのは、かけた直後にそれが交通事故で亡くなった息子さんの電話番号だと気づいてしまったからだそうで。私が出たときには驚いて、思わず知っていた都市伝説の名前を口に出したのだそうです』

「そりゃファインプレーだな」

『私としてはやっぱり、感謝しているのですよ。そのおかげでこうして自我を得て、アキラさんとお話しすることができたのですから。……ですが当時は大変でした。まだ私

はメリーさん見習いですらなかったので、千里眼を持っていなかったのです。毎日の電話の中で少しづつ場所を聞き出してゆくのは大変でした』

「毎日？」

　そう問うとメリーは、少し口ごもった後に言った。

『……実はおじいちゃんは、入院していたのですよ。詳しくは聞いていないのですが血液の病気だそうで、それに軽度の認知症も患っていました。死んでしまった息子さんの電話番号にかけてしまったのも、それがあるのかもしれません』

「……そうか」

『はい。……病院ですから電話ができる時間が限られていましたし、一度に多くのことを聞き出すのも不可能でした。ですから私は、何日も時間をかけておじいちゃんに会いに行ったのです』

「……どうだった？」

『楽しかったのですよ。おじいちゃんは私を孫娘のようだと言って、この姿を与えてくれました。まだ私はあやふやもあやふや、形どころか名前すらもはっきりしない存在でしたので、おじいちゃんのイメージ一つでこうも変わったのです』

　それが、ワンピース姿の理由ってわけか。

　……で、今もその姿でいるってのはつまり。

「……迂遠な聞き方が下手だからバッサリ聞くけどな」
『はい』
「おじいちゃんはどうなったんだ？」
『亡くなりました。……月の明るい夜でした。私がおじいちゃんのところへたどり着いて病室に忍び込むと、気配に気づいたのでしょうか、おじいちゃんは薄く目を開きました。……そして驚いたような笑顔で私に言ってくれたのです。『よく来てくれたなぁ』と』
「……」
『静かな時間でした。私はどうしていいのかわからずに立ちつくしていて、その後おじいちゃんは何も言わずに目を閉じて。そして、次の朝にはおじいちゃんは冷たくなっていました。……私は誰かが気付く前に病院を抜け出して、どこかで泣いていました。人の死があんなに悲しいことだと、私は知らなかったのです』
　メリーは落ち着いた、芯を感じさせる声で言う。
『でも、悲しかっただけじゃないんです。そのときに私は、確かに思ったのです。〝私が訪れることで笑顔を浮かべてくれる人がいたのなら、それならば私は、メリーさんになってみたい〟と。……誰かに言ったらきっと、笑われてしまうでしょうね。怪異が何を言っているのか、と。けれども、一つくらいはそういう怪異がいてもいいと思うので

すよ。怪異に生まれたからではなくて、怪異になりたいと思ったから怪異になった存在がいても』

「……」

『その後、都市伝説組合に行って正式にメリーさん見習いという怪異として認めてもらいました。……おじいちゃんは寝たきりでしたからその背後に立つなんてできずに、メリーさんとして半端にしか成立していなかったので、千里眼しか得られませんでしたが。それでアキラさんに電話して……あれ、アキラさん？』

ずびっ、と鼻をすすった。

「……なんだよ」

『あの、泣いて……？』

「……泣いてねーし。マジ全然泣いてねーし。これ部屋が寒いから出た鼻水だし」

『……あの、涙が』

「汗だ。部屋が暑いから出た汗だ」

『矛盾しているのですよ？』

困惑した様子のメリー。

……もちろん全然泣いちゃいないが、しかし感じ入るものはある話だった。要するにメリーというやつは、俺とは違って確固とした目的があって生きているやつなのだ。

特に目的もなく、可もなく不可もなく勉強ができたから大学に通っている俺のような奴からしてみれば、それは単純に尊敬できることだった。

だから俺は言う。

「……さてメリー、罰ゲームだ」

『へっ!?　写真は送ったではないですか!?』

「やれやれ……他人の言葉を信じるなと学校で習わなかったか?」

『なんでー!?　なんでなのですか!?』

……それは要するに、この小さな少女が俺にはできないようなことを軽々とやってのけているということに対する、ちょっとした悔しさのようなものだったのだろう。

１８にちめ

「……それでは、また明日に」
『ああ、また明日な。夜道に気をつけろよ』
そう言い残して、電話がぷつりと切れました。
私は小さくため息をついて、画面の通話終了のマークを押します。
……私がメリーさん見習いとしてアキラさんを担当しだしてから今まで、ずいぶんと時間が経ちました。今の正確な自分の場所はわかりませんが、それでもかなり彼に近づいていることくらいはわかります。
アキラさんと話せる時間というのは、あと二週間も無いのでしょう。だってそれまでに私は、あの人の住む場所へと辿り着いてしまうのですから。
かぶりを振って、長崎を発って以来、一度も止めていない足を動かし続けます。
てくてく、てくてく。ひとはりひとはり布切れに糸を通すように、一歩ずつ、歩幅の分だけ進みます。最初の頃には果てしないように思えた道のりでしたが、いつの間にか

半分以上も進んで来てしまいました。

空を見上げると太陽が沈む、ちょうどその瞬間でした。……これから夜になります。もう少しで西の空から、夕焼けの光が消えてしまいそうです。

夜。……それは昔から、怪異の時間と決まっています。

太陽の消失は光の恵みを奪い、暗闇は魑魅魍魎をはらみます。現代では夜も明るくなってしまって久しいですが、それでも夜が私たちのような存在のための時間だということには疑問の余地がありません。

……ですが、どうしてなのでしょう。正直なところを言って、今の私はこの夜という時間があまり好きではありません。

太陽が眠り、街が眠り、人が眠る。……そんな時にただ一人、誰にも見られずに遠く遠くを目指して歩き続けていると、目に見えない、けれども私の中に確かに存在する何かがゆっくりとすり減っていくように感じるのです。

これが『不安』なのでしょうか？

……おかしな話なのです。昔はそれにまつわるものだったはずの私が、今になって今度は自分がそれを感じるようになっているのですから。

「……アキラさんの、せいなのです」

ぽつり、思ったことを口に出してみます。

……そうです、それはきっとアキラさんが悪いのです。だって、あの人と過ごす時間は楽しすぎて、そのせいで月が光り虫が鳴き野鳥の囀る涼やかなこの夜の時間を、私はつまらないと思うようになってしまったのですから。

ふと、疑問に思います。

あの人はいったい、私にとってどういう人なのでしょうか。

「……標的（ターゲット）。一緒に遊んでくれるお兄さん。お友達」

そしてそのあとに続く言葉は、胸の中にしまい込みます。ほんの少しだけ、頬が熱いような気がしました。

あの人と出会ったときの私は、どこか気負っていたのかもしれません。決心をして、その決心を嘘にしないためだけに行動して。

……けれども今の私は、ほんの少しそれとは違います。

「……適当ですから、あの人は」

そう、適当。……そして、優しい。あの人のことを言葉で表現するならば、それがおそらくは、一番に当てはまるのでしょう。

都市伝説としてまだまだ未熟な私は、この数週間の間にアキラさんから良くも悪くもそういう影響を受け、ほんの少しだけ変わりました。それを成長というのかといえば、よくわからないのですけれど。

もっとも怪異として考えるならば、あの人とお話しするようになってからの私は、ある意味で弱くなってしまったのかもしれません。

だってこの旅を始めた時には、これほどに夜道の寂しさを感じることなんてありませんでした。メリーさんになりたいのだという、ただそれだけの気持ちに突き動かされて、ただただ歩くことができました。

けれども今は、どこか違うような気がするのです。……もちろん、メリーさんにはなりたいという気持ちに変わりはありません。けれどもそれ以上に、アキラさんと話す時に胸を張って今日も頑張りました、と言えるように歩いているような気がします。その後にあの人に雑な言葉で褒めてもらうことが嬉しくて、そのために歩いているような気がします。

……あと、二週間もないのに。二週間なんて、ほんのわずかな時間です。アキラさんと話して話して、それでも伝えたいことが泉のように湧き出てきます。

自分がため息をついたことに、そう思った後で気づきました。

◇◇◇

上を見上げて、昏れなずむ空の下を歩きます。

もう一歩先へ、さらに遠くへ。
そうしているうちにだんだんと、周りが暗くなってきます。
人通りはほとんどなくなり、聞こえる音は虫や鳥の森の奏でる音、風が運ぶざわついた音、時折通過する車が走る音……たったそれだけになってしまいます。
生ぬるい風がむっとするような空気を運んできて、私は少しだけ顔を伏せました。
私は怪異ですから、歩き続けても疲れることはありませんし、体が汚れることもありません。ものを食べる必要だってないので、きっとどこでも、一人で存在し続けることもできるのでしょう。……それなのに。
「……声が、聴きたいです」
どうしてこんなにも、一人が寂しいのでしょう。
ぽつりと胸の奥から言葉が零れ落ちて、私は慌てて自分の口を押えました。
「い、いけませんいけません！　こんなことでは、またからかわれてしまいます！」
いいかげん、私も怪異としての風格というか威厳というか、そんな感じのものを身につけねばなりません。こんな調子では、アキラさんに笑われてしまいます。
ため息を振り切り、気にしない気にしないと自分におまじないをかけて、ただただ歩いて……。私はそこでふと、あることを思いました。
……私はあの人に会いに行って、その後はどうするのでしょうか。

メリーさんになる。それはもう決めていることで、思い直すつもりはありません。

……けれども、それ以外には？

私にとっては今が何よりも楽しい時間で、今に満足してしまっています。

だったら。……あの人と話せなくなった私にいったい、何ができるのでしょう。

「……こんなこと考えるのは、あの人にとっても迷惑なのでしょうけど」

そんな、わかりきったことを口に出してみます。

だってきっと、あの人にとっての私は、少し変わった夏の思い出の一つなのです。人生に百回もあった夏のうちの、たった一回。過ぎ去った思い出のひとかけら。……今はともかく少し経てば、きっと私はあの人の中で、そんな程度のものになってしまうのでしょう。

「……それが、当たり前なのです」

でも、という思いが消えてくれません。

アキラさんにもそれとなく話していますが、私のような怪異に憑かれるということは本質的には忌むべきこと、よくないことなのです。なぜなら怪異とは、文字通りに怪しくて異なものなのですから。

人間にとっての私たちは、基本的には百害はあっても一利はない存在だと言って間違いではありません。

例えば実際、アキラさんなんかは私に付き合ってくださっているせいで午後をまるまる潰してしまっているわけですし。……いえ、千里眼であの人を見るといつも寝ているか本を読んでいるかなので、ちょっと微妙な気もするのですが。

ほんの少しくすりと笑って、私はまだまだ歩き続けます。

◇◇◇

ひたすらてくてくと歩き続けて、空はもう真っ暗になってしまいました。

ひどくぼんやりと頼りなく、雲に隠れながら月が夜道を照らします。

アキラさんは今ごろ何をしているのでしょうか。千里眼で覗いてみようとしたところをぐっと我慢します。

……お風呂なんかに入っていたら大変ですから。この前はちょうどその場面を覗いてしまったのです。もちろんすぐにやめましたが、胸がどきどきとして、次の日はぎこちない話し方になってしまったのです。あんな失敗は繰り返したくありません。

……もちろんそれ以前に覗き見はよくないのですが、そこはメリーさんとしての特権ということで。

「……んっ」

そんなことを考えていると、急に風が強く吹きました。アスファルトの熱を吸った風はうだるような熱気を纏い、思わず足を止めて顔をそむけてしまいます。

……夏は暑いものと相場が決まっていますが、もう少しなんとかならないものでしょうか。私は熱中症になることもないですし汗をかくこともありませんが、それでも暑いものは暑いのです。この辺りはやはり、中途半端な怪異として私が未熟な部分なのかもしれません。

ため息をついて再び歩き始めます。

と、同時。私は心臓が止まるかと思いました。

「ひゃっ!?」

……目、でしょうか？　暗闇に浮かぶ、緑色に光る小さな二対の光点。それが私を、じい、と見つめていたのです。

「……な、なんでしょう？　私になにか御用ですか？」

少し横に移動しても目はこちらを見ています。

その場でぴょんぴょんとジャンプしてみてもこちらを見ています。

縮こまって存在感を消してみてもこちらを見ています。

「ど、どうしましょう。……目？　目の、怪異？」

目だけの存在なんて怪異に違いありません。けれどもいったい、そんなおかしな怪異

が存在するのでしょうか……？

と、そんなことを考えて観察しているうちに正体がわかりました。

「ただの、猫さんですか……」

がっくりとうなだれます。

……目の正体は、真っ黒な猫さんでした。なかなかお目にかかれないような、その見事な暗闇色の体が夜に紛れていたのです。

「わ、私って……」

私は頭を抱えたくなりました。

いかに見習いとはいえ怪異です。それなのにただの猫さんを怪異と見間違えるとは、いったい私はどれだけ未熟なのでしょうか。仮にも千里眼という、見ることに特化した能力も持っているというのに。

……言い訳をさせてもらえるのなら、びっくりした時の反応なんて人間も怪異も動物も大差ないのです。ええ、そういうことにしておきましょう。

「夜のお散歩ですか？　あなたは真っ黒なので、車にひかれないように気を付けてくださいね」

しゃがみこんで目線を合わせてそう言ってみます。

猫さんは私の言ったことを理解しているのかいないのか、なー、と鳴くだけでした。

そして私に興味をなくしたのか、こしょこしょと前脚で顔を掃除しています。その後、うなー、とあくびをしてごろごろと喉を鳴らしています。

……それを見ていると、私の中にある疑問が芽生えました。

もしかして。もしかしてなのですけれど。

……世界で一番可愛い生き物というのはもしや、この猫さんという生き物なのではないでしょうか？

「……にゃー」

そう言ってみると猫さんは、うなー？　と鳴いて首を傾げます。

私は衝動的にその辺に生えていた雑草を引き抜くと猫さんの前に差し出します。

ふりふりと揺らしてみると、猫さんは何も考えていない顔でそれを追います。

……か、可愛い。

左右に揺らすと首ごとその行方を追い、ときおり前脚で猫パンチを繰り出してきます。

前後に近づけたり遠ざけたりすると近づけたときに猫パンチを出してきて、ときどき混ぜるフェイントに引っかかって途方に暮れたように前脚を引っ込めます。

二本に増やしてからは猫さんの目線が追い付かず、ぐるんぐるんと目を回していました。両脚で捕まえようとして失敗し、べちゃっと地面に張り付く様子はきゅんきゅんと

する愛らしさです。
「……♡」
しばらく無心でそうしていて、ふと私は我にかえりました。
……私はいったい、何分間こうしているのでしょうか？
「……い、いけませんいけません！　私はメリーさんになるのです！　惑わされてはなりません、進むのです！」
そう自分を鼓舞して、猫さんと遊びたい気持ちを振り払います。
歩くのです。歩いて歩いて、明日もまたアキラさんに褒めてもらうのです。
私は立ち上がって、そしてまたしゃがんで、猫さんに語り掛けました。
「あげられる食べ物を持っていなくてごめんなさい。でも、遊んでくれてありがとうございます。……どこかで会ったら、また遊んでくださいね？」
そう言って頭を撫でようとすると、猫さんはさっと横に逃げて行ってしまいました。
……どうやら、直接接触は無理なようでした。
少しだけ寂しく思いながら、私も腰を浮かせます。
さて、旅の再開です。あとたったの五百キロ以上千キロ未満、見事に歩きぬいてみせるのです。
そう思って、立ち上がった瞬間。

――私の目は、大きく見開かれます。
私の歩く歩道のすぐ横の車道、つまり、ほんの一瞬前に猫さんが飛び出ていった車道。
そのすぐ後ろに、とてつもないスピードで車が走りこんできていたのです。
「……――っ!?」
声にならない悲鳴が漏れます。
道路上では猫さんが驚きに体を硬直させて立ち止まり、車の進路上にいます。
猫さんの体の色が災いしているのでしょう、車を運転している人は猫さんに気付かず、スピードを緩める気配はありません。
あと数秒もありません。
きっと猫さんは、なすすべもなく轢かれてしまいます。
――だからその瞬間に私は、何も考えていませんでした。
ただただ、猫さんが死んでしまう場面を見たくないというその一心。
……ただその一心だけで、私は道路へと飛び出したのでした。

◇◇◇

「……バッカ野郎、気い付けろ！」

そんな罵声を残して、車がそのままの勢いで走り去っていきます。

私はただ呆然と、走り去ってゆく車を眺めていました。

数十秒たってからようやく実感が湧いてきます。

道路のわきにへたり込んでいる私の体。そして腕の中には、脱出しようともがきにもがく猫さんの感触。どうやら……どうやら奇跡的にも間に合い、私も猫さんも轢かれずに済んだようでした。

どっと体の力が抜けます。

……怖かったのです。本当に、怖かったのです。

私は怪異です、死ぬことはないのでしょう。けれども、車に突っ込んでいったあの時に感じた感情は紛れもなく、今までに感じたこともなかったそれ……『恐怖』でした。

呆然としたままの私の腕のなかから、するりと猫さんが抜けだします。

その軽やかな足取りからは、怪我の様子はありません。大事でなくてホッとします。

仮にあと一秒、あと一瞬。遅れていれば、間に合わなかったでしょう。

「……もう二度と、道路に飛び出してはいけないのですよ」

草むらの中へ逃げてゆく猫さんになかば独り言のようにそう言うと、なー、と返事が返ってきました。なんともな生返事に気が抜けます。きちんと聞き入れて、気を付けてくれればいいのですが。

そのまま猫さんの影は草むらに隠れ、ここに残るのは私一人。ついさっきのことが嘘のように静まり返った夏の夜だけが残っています。

「……よかった」

ぽつりとそう呟きます。

何はともあれ私は、目の前で消えようとしていた命を救うことができたのです。少なくとも私自身としては、それは誇らしいことでした。

ぱんぱん、と服の埃を払って立ち上がります。空気を吸いこみ、深呼吸をします。

体全体を覆っていた掻き毟りたくたくなるような不快感が、一呼吸ごとに薄れていきます。数十秒もしないうちに私の体からは擦り傷や打撲が消え去り、完全に治っていました。

……今の今まで全身を覆っていた、なんとも表現のできないあの感覚。叫びだしてしまいたくなる、あの感覚。それこそがきっと、『痛み』というものなのでしょう。

しばらくの間、そうして何も考えることができないままに立ち尽くしました。数分ほ

どしてから、ようやく頭がまともに働くようになってきます。
「……歩き出さなくては、いけません。旅の途中、なのですから。……こんなところで時間をつぶしている場合では、ないのです」
私は。
確かに私は、そう思って歩き出そうとしたのです。
足を少しだけあげて前に出し、重心を傾かせ、その勢いでもう片方の足を出して、それの繰り返し。……簡単です、あまりにも簡単な動作です。幼稚園に通うような幼子だって、歩くことなんて簡単にできます。
それなのに――私はなぜか、歩き出すことができませんでした。
「……え」
足をわずか持ち上げて踏み出すというその動作。
……けれども、そんな簡単なことができません。足が接着剤で地面に貼り付けられてしまったように、縫い付けられてしまったように、固定してあるように。
たったの一歩も、動かないのです。
「……冗談、なのです。私は、ちょっとだけ歩くのに疲れたから、冗談を言って疲れをごまかそうとしただけ、なのです」
そんなことを言って、疲れることのない都市伝説なのに『疲れる』なんて言ってみて、

足が動かないということを嘘にしようとしてみます。

けれども、そんなことをしてみても足は動きません。たったの一歩も、いえ、それどころかただの半歩も動くことができません。

右足ではなく左足から歩き出そうとしてみても、やはり足は鉛でできているかのように重く、ただの一歩分も動かせません。

「どうして。どうして、私の足は動かないのですか……?」

誰も答える者のない暗闇に問いかけます。

もちろん答えは返ってきません。

……では、いったい誰がその問いの答えを知っているのでしょうか。

「思って、いません……」

自分でも知らないうちに、そう口に出していました。

「……思っていません。思っていません。私はそんなことを思っていません。私はそんなことを考えていません。私は自分で決めたことを嘘にするようなことを思っていません。私は――」

……そこでやめておけばよかったのに。

私の口は、その言葉を吐き出してしまいました。

「――もう歩き出したくないだなんて、思っていません」

……そう口に出してしまった瞬間、思わず地面にへたり込みます。ごつごつとした路面の感触は、どこか遠い世界の出来事のように感じられます。

「……だって、私はメリーさんになるって決めて」

ずきん、と。

そう思った瞬間に、さっき初めて味わった感覚……『痛み』がぶり返します。

ぐわん、と。

それを自覚した瞬間に、さっき初めて味わった感情……『恐怖』が蘇ります。

「……――っ！」

がたがたと、私の体は震えていました。

震えを止めようとしても、止まってくれません。

どうして。

その問いの答えが、私の唇から零れ出ます。

「……痛みがあるのです。怖いのです。……だって」

さっきの猫さん、私が助けていなければ、どうなっていたのでしょう？

「ばらばらに、なって……。死んじゃって、いました」

ぽつりと唇から零れ出た、その当たり前の事実に。
私は立ち上がれません。立ち上がることができません。
体がどうしようもなく、ここから動き出すことを拒否していました。
「〜〜〜〜っ！」
頭が、割れそうです。
だって、おじいちゃんは笑ってくれて。だから、私はメリーさんになりたくて。それなのに、猫さんは唐突に死にかけて。つまり、誰かが理不尽に死んでいくことなんて当たり前のことで。けれど、私はそれが当然のことだなんて今の今まで知らなくて。それなのに、誰かの助けになれるだなんて勝手に思っていて。これまで、そんなことを信じてただただひたすら歩いてきて。その末に、当たり前の事実を知ってこんなにも怖がって——
「……私、は」
そう口に出した途端、頭の痛みがぼんやりと薄れていきます。
私は大きく息を吐いて、そして空気を吸い込みます。
ぬるく湿った空気が私の中に満ちる感触だけが、溶けたような思考の中で唯一はっきりとした、確かなものでした。もう私は何をすればいいのか、どうしていいのか、それすらもわからなくなっていて……

……だからあの人に、電話をかけました。

18にちめ　メリーさんの電話。

「どうしたメリー？　こんな時間に珍しいな」
夕飯を食べ終わってごろごろと寝転がりだらだら生活の醍醐味を謳歌していた俺は、かかってきた電話の相手にそう言って、椅子に座りなおした。……いや、珍しいというよりも初めてか、メリーがこんな時間に電話をかけてきたのなんて。だっていつもいつも昼間から夕方まで、午後まるまるを一緒に話してたもんな。
それが俺とメリーの関係だと思っていたから、なんとなく新鮮だ。
「なんだよ、一人が寂しくなって話し相手が欲しいのか？」
つまり俺のその言葉は、どちらかといえば照れ隠しみたいなものだったのだろう。メリーがいつも以外の時間に電話をかけてきてくれたことが嬉しくて、それを知られないためにからかってやろうと思ったのだ。
だから。
『こんばんは、アキラさん。……そうなのです。いっしょにお話ししませんか？』

……その言葉には、なんとはなしの違和感があった。メリーというやつは、ここまで素直な少女だっただろうか？　もっと恥ずかしがりで、意地っ張りで、もっと……

――いや、そうじゃないか。俺が本当におかしいと思ったのはそんなことじゃなく、その濡れたような声だった。いつもと変わらないメリーの声なのに、その声は艶やかなまでの湿り気を帯びている。しっとりと耳の中に入ってきて、ずぶずぶと脳の中に融け入るような。可愛らしい声なのに、その中におぞましいまでに色気を含んだ、媚びるような声。

……明らかに違っていた。

俺の知っているメリーはこんな、相手に包み込んで融かしてしまいそうな声を出す少女じゃない。むやみに元気にあふれた、聞いているだけでこっちまで気分が明るくなるような、太陽の光のような声を出すやつなのだ、メリーという少女は。

そしてその俺の疑念は、次のメリーの言葉で確固たるものへと変化した。

『……そうです、最初からそうすればよかったのです。アキラさん、私と、ずっとずっといっしょにお話ししませんか？』

「……はっ？」

『昼も夜も、ずっといっしょに私とお話ししてください。そうすればきっと、私はもう何も恐れずに済むのです。あなたさえいればきっと、私は幸せになれるのです。……どう

して、それに気づくのにこんなに時間がかかっちゃったんでしょうか。もっと早くに気づいていればもっともっとあなたと一緒に……』

「ちょ……ちょっと、待て」

俺はその声をとてもじゃないが聞いていられず、メリーの言葉を遮った。

「お前、誰だよ」

『……何を言っているのですか。私ですよ、メリーです。あなたと一緒にたくさんたくさんお話しした、そしてこれからはずーっと一緒にお話しする、メリーです』

「……なんだよ、おかしいな。俺の知ってるメリーってやつは、こんなに俺にデレデレじゃない、ツンデレ可愛いじゃじゃ馬な制御の効かないやつなんだが」

……イライラする。なんだか、もの凄くイライラする。

俺はもともとあんまり短気じゃないはずなんだが、今回に限ってどうしてまた、こんなにもイライラするのだろうか。何がイライラするんだかはっきりとはわからないが、とにかくイライラする。

そのイライラを押し込めて、俺はメリーに聞いた。

「……おい、メリー」

『はい、なんですかアキラさん?』

「聞こえないんだけどよ、歩く音。……どうした?」

『ああ――もういいです、あんなの』
「……あ？」
　一応。あくまでも一応のこととはいえ、そのときの俺には確かにまだ、メリーと冷静に会話しようと考えるだけの心の余裕があったのだ。
　だが。……その言葉は、駄目だった。
　自分の心の抑えが外れていくのがわかる。
「おい、もういっぺん言ってみろ」
『……もういいのですよ。だって、そうでしょう？　歩くなんてやめてしまえばいいのです。メリーさんなんて諦めて、あなたとずっとずーっとお話ししているのです。だってそっちの方がきっと、ずっとずっと楽しいのですから。ねえ、アキラさんもそう……』
「ハァ？」
　ぷちん、と頭の小血管が切れる音がした。
「お前、ふざけんなよ」
『ふざけたことなんかじゃありません。私はもう……』
「だから。それがふざけていると言ってる」
『……っ。関係、ないでしょう。私がメリーさんをやめても、私がメリーさんを諦めても、アキラさんには関係なんて』

「大ありだ。……おいお前、馬鹿にすんなよ？　俺の友達の、大事な大事な友達のメリーは、諦めるなんてやわな根性してねぇよ。……お前、誰だよ。諦める？　そんなことをほざくメリーを、俺は知らない」

『……なんで、そんなことを』

「あぁ!?　言わなきゃわからねえか!?」

俺は怒鳴っていた。こんな腑抜けたメリーは俺の知ってるメリーじゃない。

……俺にだって分かる。人が自分の思っているのと全く違ったことを言ったからって、それに怒り出すのは理不尽だってことくらいは。……でもさあ、理不尽だろうがなんだろうが、それでも抑えきれない憤りのことを『怒り』ってんだ。

ただただ自分の感情に従って、俺は怒っていた。

「メリーさんを諦めたお前は、俺の友達なんかじゃねぇ、って言ってんだよ」

『……そん、な』

「反吐がでる。それ以上喋んな。めそめそ泣きてぇならどっか行っちまえ。そしたらもう二度と俺に電話すんな」

『……――――っ！』

俺がそう言った瞬間、電話の向こう側から引き攣るような声が聞こえた。

余裕ぶった様子なんてまるでない、今まで縋っていた支えを失ってしまったような。

それだけに切実に、メリーは恐慌に陥っていた。

『……だっ、て。だって、だって、だって、だって、だってだってだってだって！　じゃあどうすればいいのですか！　もう無理です、もう嫌です！　これ以上歩くのなんて、歩き出すなんて、私には無理です！　そう、わかってしまったのですから……！』

「……話すならわかりやすく話せ」

『……怖かった、の、です』

メリーは一転して静かな、怯えたような声でそう言った。

『……事故に、あって。車が、ぶつかりそうだったのです。怖かったのです、もし本当にぶつかっていたらと考えると、もしあの子を助けられなかったらと考えると、もし私だけ助かってあの子の死体を見ていたらと考えると……！　……怖くて怖くて、もう二度と歩くことなんてできないのです』

「……」

『……同じ死でも、おじいちゃんの時はこれほどに怖くなかったのですよ。あの人は最後の最後まで生ききって、最後は笑っていたから。私を見て、笑って、くれたから……！』

「……」

『知らなければ、よかったです。この世にこんなに理不尽な恐怖があるなんて、知らなけ

ればよかったです。私の目の前で、私が何もできずに死んでしまうかもしれない命があるなんて、知らなければよかったのです。そうすればきっと、私は歩き続けていられたのです。……でも、知ってしまったから、私は、知ってしまったから。だから……無理、なのです』

「……そうか」

その言葉を聞くうちに、俺の頭は冷えていた。

……何があったのか、詳しくは知らん。知ったとしても、それは俺にとっては理解しきれない何かなんだろう。けれども今、電話の向こうのメリーという少女は確かに怯えていた。どうすることもできない絶望があるのだと知って、恐怖に震えていた。

……俺にはやっぱり、空気も人の心も読めないようだった。

メリーが何を思ってそう言ったのか聞き出そうとするんじゃなくて、ただ俺がメリーの言葉を認めたくなかったから怒鳴ってしまった。

失敗だ、と思う。だがだからこそ、俺のできることをしてやりたい、とも思う。俺は精一杯、俺にできる限りの慰めの言葉をメリーにかけようとして……

『……きっと、駄目な私が頑張ろうとしたのが駄目だったのですよ』

出かかっていた言葉が、止まった。

『もともと都市伝説ですらなくて。出来損ないのダメダメで。いっときの感情だけに流

されて。身の程知らずに心を躍らせて』
「……おい、黙れ」
『無駄に頑張っちゃって、馬鹿みたいですよね』
「黙れ」
『――こんな私を、せめて笑ってください』
ガン、と大きな音がした。俺が立ち上がり、座っていた椅子を蹴り飛ばした音だ。
ブチン、と頭の中で音がした。俺の頭の血管が二、三本纏めてキレた音だ。
あーーーーー……知らん、もう知らん。こいつが言ってることなんざ一切合切知らん。アホがアホなこと喋りやがって。馬鹿なのか？　知能が無いのか？　どうして俺をこんなに怒らせることができる？　……いやいや、狙ってやっているとしたら大した策士だ。本当にもう、どうしようもないクソッタレが。
俺は深く深呼吸し、空気を肺いっぱいに吸い込み、思いっきり声に変えて吐き出した。
「この、馬――――――ッッ鹿ッッが!!!!!」
『へっ？　えっ？　……え？』
「馬鹿！　馬――ッ鹿！　ああーーっ、イラつくムカつく腹がたつこのクソアホが！　本っっっ当にメリーってヤツはこの大大大大大馬鹿が！」
『え？　……へっ!?』

困惑するメリーに言いたい放題に罵詈雑言を投げつける。
「常日頃からアホだアホだとは思っていたがここまでとは思ってなかったよこの馬鹿めが！　どうしてその結論に至る？　どうしてそんなふうに考える!?　客観的視点ってやつをほんの一ミリでもいい、持とうと努力しろやこのクソ馬鹿メリーが！」
『なっ……なっ！』
「どうせ空っぽの頭だろすっからかんにして何も考えんな考えたってどうせゴミみてーな結論しか出てこねぇに決まってるよバーカバーカ！　あー無理無理無理だよなどーせつるっつるで鏡よりもぴかぴかの脳みそにゃ俺の言葉も聞こえやしてねえだろ!?」
『何、を。何を、言うのですか……!?』
メリーの声に怒りが篭った。
知らんわ勝手に怒れや。
「何度でも言ってやるよクソボケ！　お前は！　馬鹿なの！　頭悪いの！」
『か、勝手なことを……！』
「なんだよいっちょまえに怒るだけはできんのかよ判断能力ゼロのみんなにつられて赤信号渡るちゃんでも！　そりゃ大層なことだよ小学校からやり直してこいバーカバーカ！」
そう言った後に聞こえてきたのは、初めて聞く声だった。

『……ふざけないで、ください！』

……メリーの怒鳴り声だ。

『勝手なことを、どこまでも勝手なことを言って！　どうしてそんなことを言うのですか、どうしてそんなことを言えるのですか!?　……私、頑張りました！　頑張って頑張って、太陽が昇っても沈んでも歩いて、たった一人で寂しくても泣かずにひたすらに歩いて！　……でも、それでも！　それでも、怖いのに！　怖くて怖くてたまらないのに、どうしてアキラさんにはそんなことが言えるのですか!?』

俺はフン、と鼻を鳴らした。

お前はそこまで理解していながら、どうして一番肝心なことを理解していない。

『アキラさんに私のつらさがわかりますか!?　アキラさんが私のことを理解できますか!?　……無理です、無理ですよ！　だってアキラさんなんて、何にもしていない！　家に篭ってダラダラしてるだけの駄目な大学生じゃないですか！』

俺はガシガシと頭をかく。

……そーだよ。そりゃ俺はそういうやつさ。

でもな。

『アキラさんなんかに！　……頑張ってないアキラさんなんかに、私のことなんてわからないでしょう!?』

――それでも俺には、お前に見えないものが見える。

全部吐き出してぜぇぜぇと息をするメリーに、叫ぶ。

「だからこそだよ、この馬鹿メリーが！」

『……っ!?』

「いいか、よく聞け。……お前の言うとおりに俺はただの大学生だ。適当に生きて適当に暮らして、適当に大学に通ってるよ。だからお前のつらさは欠片もわからん、わかろうという努力なんざしてない！　そもそも頑張るなんて言葉を親の体に忘れてきた俺みたいな男がお前に共感なんてできるはずもない、そりゃ当たり前だ！　……でもな！」

知ってるよ。メリーに言われなくても知ってる。

俺は中途半端なヤツだ。

夢も情熱も目的もとっくの昔にどこかに忘れてしまって、ちゃらんぽらんになんとなく、体が死んでないから生きている。そんな男だ。

当然、志なんかないし、ご立派な信念も持ち合わせちゃいない。大学には親から仕送りをもらうために行っている、くっだらねー男だ。

そして俺はそれを自分でそれを知っているから――だからこそ。

……なおさらに、思うのだ。

「お前は！　頑張ってんだろ……！」
　メリーに、ただただ思っていることをぶつける。
「目的のために、なりたいもののために、日本を歩き通す……!?　アホか！　そんなこと、俺はできん！　お前はアホか！　そんなに頑張れるとか、アホか！　俺にはお前の真似なんてできないしするつもりもない！」
　本当にメリーは馬鹿だ。
　どうしてわからない？
　こんな、俺にさえ簡単に理解できる事実が。
「――だから！　お前はすごいんだよ！」
『……え』
「一日くっだらねーことにうつつ抜かして死んでるみたいな生きかたしてる俺なんかより、俺の知ってる他の誰より、メリーはずっとずっとすごくて頑張ってる奴だ！　俺ですらそれを知ってんだよ！　……なのに、なのにだ！　どうして、お前は自分で自分を貶める!?　おかしいだろ、そんなのダメだろ！　ざっけんな、メリーを馬鹿にすんな！
　メリーの努力は絶対に無駄なんかじゃねぇよ！　だから、だからさ……！」
　頑張ってないやつが頑張ってるやつにこんなことを言うのなんて反則かもしれないが、それでも。

「お前は、諦めんな！　諦めてんじゃねーよ、メリー！」

俺の勝手な言い分に、メリーは何も言わなかった。

数十秒たってから、ぽつりと呟く。

『……ありがとうございます、アキラさん。あなたがそう言ってくれるだけで、私は報われました。これまでが無駄じゃなかったって、そう思えます。……けど』

「……けど、なんだよ」

『私は、そんなに強くないのです。もう私はメリーさんになることを諦めて、とっくに折れてしまっているのです。だからアキラさんにそう言ってもらう価値なんて……』

俺はそれを聞いて、ため息をついた。

「嘘じゃねえけど、本当でもねえだろ、それ」

『……本当のことなのです。私はもう』

「メリーさんになりたくない、って言ってみろよ」

『で、ですから。私はもう、メリーさんになろうなんて……』

「違う。『メリーさんになるのを諦めた』じゃなくて、『メリーさんになりたくない』って言ってみろよ」

『……簡単なことじゃないですか。私は、メリーさんになんて、なりたく……』

電話の向こうが沈黙する。

　メリーはその後の言葉が、言えなかった。
「ほらよ、やっぱりだ」
『……ち、違います。言えない、なんてそんなこと』
「違わねえよ。いいか、はっきり言ってやる」
　どうして俺にすらわかることが、メリー自身にはわからないのか。
　……本当、どれだけ不器用なやつなんだよ。
「お前、メリーさんになりたいんだろ」
『……』
「だってお前、メリーさんになるのが嫌になったとは一回も言ってねーしな。メリーさんになりたくないんじゃなくて、歩き出すのを怖がってるだけだ。自分が無力だから、そんなくだらない理由で諦めようとしてるだけだ。誰かを笑顔にしたいってお前の言葉は嘘じゃないし、嘘にできない。……そうだろ？」
『……そうだと、しても』
　返ってきたメリーの声は、泣きそうだった。
『無理なものは、無理なのです』
　メリーは澱を吐き出すみたいに、言う。
『もう私、頑張れないのです。これまで憧れだけで辛くても進んで来ました。でも、もう

無理です。……アキラさんは、私がまだメリーさんになりたいと思っている、と言いました。……ええ、その通りなのですよ。私はメリーさんになりたくてなりたくてたまりません。まだこの憧れは、私の中から消えていません』

でも、とメリーは言った。

『でも、それでも……私は諦めたのです。憧れでは乗り越えられない、恐怖があるのです。だからもう私は、無理です』

「……もう、憧れのためには頑張れないってか?」

『……はい』

その静かな、けれど確かな重みを伴った声に俺は息を呑む。

願い――メリーさんになりたいという願い。

もどきじゃない、偽物じゃない、本物になりたいという願い。それこそがきっと、メリーを構成するもので、メリーそのものなのだ。その一番大切な部分が今、折られようとしている。

まだ、完全に折れてはいない。けれどもこの様子では遠からず折られてしまい、二度と取り返しがつかなくなる。……それは、ただの予感だ。霊感もないその辺の人間である俺の、ただの予感でしかない。けれども同時に、それは確かに当たっているのだという奇妙な確信があった。

だから俺は、メリーに言った。
「……いいかメリー。俺は今から自分勝手なことを言う」
それは俺の勝手な望みで、メリー自身それを望むかなんてわからない。でも、それでも俺は、メリーにメリーでいてほしい。
だから……メリーに諦めさせない。諦めさせて、たまるか。
「今だけでいい。……俺のために頑張れ」
『……え？』
何を言っているのかわからないという様子のメリーに、言葉を重ねる。
「もう自分のために頑張れねえってんなら、俺のために頑張れ。お前に感動した俺のために、諦めんな。……頼む。頼むから」
しばらく沈黙が続いて、ややあってからメリーが言った。
『頑張れ、と言うのですか……？　もうこんなに辛いことをやりたくない私に、それでもアキラさんは、頑張れって……』
「ああ。俺のために頑張れ。俺のためにメリーさんになってくれ。俺は、どうしてもお前にメリーさんになってほしい」
『……か、勝手じゃないですか。そんなの、アキラさんの勝手じゃないですか！』
「そうだ。……俺が勝手な奴だってことは、俺が一番知ってる」

『……どういうこと、ですか?』

俺はちらりと腕時計に目をやる。

……十時間、ってとこか。

メリーの言葉に答えずに、一方的に言い渡した。

「悪いが電話はここで終わりだ。ちょっとした野暮用が入った。……じゃあな」

『ア、アキラさん? ……アキラさん!?』

通話終了をタッチする。

メリーから電話がかかってくるが、今は無視だ。

俺は壁にかかっていたメッシュジャケットを着込み、財布から数枚の紙幣を取り出してポケットに突っ込んだ。小物入れからキーを取り出し、フルフェイスのヘルメットを持ち出して駐車場へ急ぐ。

そこに停まっているのは最近とんとご無沙汰だった、遠出用のバイクだ。キーを差し込んでイグニッションキーをオンにし、エンジンをかける。

「――ちょっと待ってろメリーさん見習い」

夜の街に排気音を響かせながらバイクで走り出す。

目指すのはもちろん、あのアホな都市伝説のところだ。

「俺がお前をメリーさんにしてやる。お前がもう歩き出せないなら、俺がお前のところ

まで行ってやる。……だから諦めんな。絶対に俺が行くまで諦めんじゃねぇぞ――メリー」

１９にちめ　メリーさんと。

「……っ！」

白い服を着た人間が視界の端に映るたびにそちらに注意を向け、落胆する。そしてまた、ひたすらにバイクを走らせ続ける。

俺はそれを、もう数え切れないほどに繰り返していた。

昨夜の電話からもう何時間だろうか。

同じ姿勢をとり続けたせいで体の節々が嫌な軋みをあげ、埃が積もり積み上がるように疲労が堆積している。

それも当然っちゃ当然で、なにしろバイクを止めるのはガソリン入れる時だけで、それ以外はただひたすらにメリーを目指しているのだから。

空を見上げると、太陽が顔を覗かせている。

久しぶりに体に浴びる太陽の光は、気持ちがいいというよりはむしろむず痒い。炙られるような熱が肌の表面で疼いて、掻きむしりたくなる。

そろそろ休まなければならないってことはわかっている。バイクなんてものはずっと乗り続けてられるような乗り物じゃないし、それでなくとも俺は寝ていない。疲れのせいかなんか知らんが、視界の端なんかは歪み始めている。いい感じに頭の中身もサイケになってきて、さっきは風に舞ってるビニール袋をメリーに見間違えた。

……もちろん、俺がここで無理して走り続けるくらいなら、少し休んではっきりした頭でメリーのところまで走った方がマシなことくらいはわかっている。

それなのにどうしても休む気にならなかったのは、具体的にどうしてかと聞かれてもわからない。ただ単純にそのきっかけがなかっただけという気もするし、メリーのつらさをほんの数十分の一味わってみたかったってことなのかもしれないし、あとは案外、一度止まったら走り出せないような気がしただけなのかもしれない。

ただ、たった一つだけはっきりとしているのは、俺がメリーに早く会いたいと思っているということ、ただそれだけだった。

◇◇◇

そんなことを考えながら走っていた時期が俺にもありました。
しかしながら時間を経て少しだけ賢くなった俺は、違うことを考えていた。
無理なもんは無理です。人生諦めが肝心。
バイクはカクンカクンと蛇行し、今にも倒れそうになっていた。事故らないのは人通りも車通りもほとんどない山道だからというだけの話で、これで交通量の多いところに出ればすぐさま〝不運（ハードラック）〟と〝踊（ダンス）〟っちまうことは間違いない。
いやほら、俺も頑張った。俺的には超頑張った。これまでで一番。
でもほら、やっぱり体力の限界ってやつは厳然とあるわけで。
俺、人間だし。怪異でも魚介類でもないし。
休む。マジでそろそろ休む。
熱血とか努力とかそういうのはもういいんで。ほんと限界だから。
とりあえず今はお布団ください。
そんなことを頭の片隅で考えながらほとんど眠ったような意識で俺はバイクを駆り、止まるきっかけがないので走り続けていた。
……次。あの電柱過ぎたら休む。絶対。

いったい何回そう思っただろうか。なんかもう視界が微妙にぼやけてどの電柱を選んだのかすら定かじゃない状態なので、結局止まれない。というよりも下手にブレーキかけたらそれだけで転倒しそうな気がする。

……もしかしてこれはアレじゃないかな。死ぬまで走り続けて俺自身が新たな都市伝説になっちゃうやつじゃないかな。何それ超かっこいい。

そんなあるまじきオチを幻視しながら俺は走り続け、白いワンピースを着て麦わら帽子を被った少女のすぐ側を通りすぎ、いつになったらメリーにたどり着くのかと自問自答し、そもそも格好つけずに現在地くらいは聞いとくべきだったと後悔し、数十秒してからぼーっとした頭でそういやメリーってどんな格好だっけと思い返し……

「……――ッ！」

急ブレーキをかける。

ギキキィィーッ、と金属音のような音をたて、無理矢理バイクを路肩に寄せて停止させる。転げかけながらバイクを降り、俺はフルフェイスヘルメットを乱暴に取り去って後ろを振り向いた。

「……いない、か」

が、しかし。さっき見たはずの少女は既に、視界に存在しない。

……通り過ぎてしまったのだろうか？　あ、いや、それ以前に幻覚かもしれん。

自分の頭が大丈夫か疑いながら俺はバイクに向き直ろうとし――

「……振り返らないでください」

「……っ!?」

とん、と。

背中に、小さな重みと熱が加わった。

振り返りそうになったところをギリギリで踏みとどまる。

「振り返っちゃダメか?」

「……メリーさんという都市伝説は、標的が振り返った時点で成立してしまいます。……少しだけでいいのです。もう少しだけ、この時間を終わらせないでください。ほんの少しの間だけ、私をメリーさんではなくメリーさん見習いでいさせてください」

「……そうか」

背中合わせに、互いの体温だけを感じ取る。

夏の陽気の中でも、メリーの体温はそれとはっきりとわかるほどに暖かい。いや、熱いと言ってもいいほどだ。そのまま数分、沈黙が続く。俺がなんて言っていいのかわからなかったように、メリーもまた、なんて言っていいのかわからなかったのだろう。

「……あのよ」

「……あのっ」

二人同時に何かを言いかけ、さらに気まずさが増す。
「えっと、お先にどうぞ」
「……おう」
先を譲るメリーの声に従って、俺はその気まずさを誤魔化すような、からかうような口調でメリーに話しかける。
「なんだよメリー。ちゃんと歩けてんじゃねーか。その様子なら、俺が来るまでもなかったか？　……というか今更だが、よく出くわせたな俺たち」
「……アキラさん、忘れてしまったのですか？」
「何がだ？」
「私には千里眼があります。……アキラさんが私の方に向かってきていることなんて、簡単に筒抜けのお見通しなのですよ？」
「……あー」
俺は恥ずかしさで顔を多いそうになった。
そうだよな、忘れてたわ。……じゃあ、ってことはアレか。俺が『野暮用』とか格好つけてそのすぐ後、間髪入れずに出発したこともバレてんのか。……すげえ恥ずかしい。
恥ずかしさに黙りこんだ俺に、メリーがぽつりと言う。

「……あなたの、せいなのです」

メリーの声は静かだったが、それでも昨日のようなおぞましさは無く、水のようにさらさらと涼やかで、メリーの声が聞こえている場所だけはこのうだるような暑さがおさまっているような気がする。

俺はそれが心地よくて、だからそのまま少女の言葉を聞いていた。

「あなたの、せいなのですよ。……あなたのせいで私は、また歩き出してしまいました。もう歩くつもりなんてなかったのに、歩き出したくなんてなかったのに。それでも、歩き出してしまいました」

「……」

「だって、あなたが来てくれて。ぐうたらなアキラさんが、それでも私のために来てくれて。……私が歩き出さないわけには、いかないじゃないですか……！」

俺は小さく息を吐き出した。

「ぐうたらってのは完全に余計だけどな。ま、そうか」

結局こいつは、自分の力で歩き出せたわけだ。俺が何かをするまでもなく。

それでいい。それでこそ、メリーだ。

そんなことを思っていると、戸惑うような声が聞こえた。

「どうして……」

背中にかかる小さな重みが、揺れる。
「どうして、来てくれたのですか……？　……結局のところ私は、メリーさん見習いなのです。私があなたの後ろに立ってなにをするかなんて、私自身にもわからないのに。……なのにどうして、あなたはこんなところまで来てくれたのですか……？」
俺はその言葉を聞いて、思わずへたりこみそうになった。
なんだよ、その質問は。
「……んなもん」
ちょっと考えりゃわかる。
いや、考えなくたってわかるだろ。
……俺は自分勝手なやつで、何かに夢中になることもできない中途半端な奴だが。自分じゃ何も頑張れない、呆れたやつだが。それでも、そんな俺でも――
「誰より頑張ってる女の子のことくらい、手伝いたくなるのは当然だろ」
「……それ、は」
「お前だよ。それ以外に誰かいるかってんだ。……お前、頑張ったんだろ。毎日毎日、朝から晩まで何にも頼らず、一人きりで歩いて来たんだろ。……だったら、いいだろ。たった何百キロか、俺がお前のとこまで来ちまっても」
ふぅー、と息を吐き出す。

こっぱずしい本心をそのまま吐き出すのも楽じゃない。……これだからメリーは困ったやつなんだ。中途半端な俺に、中途半端以外のなにものでもない俺に、思ったこと全部をこんなにもはっきりと言わせやがって。

メリーからは反応がない。……まーた空気を読み違えたかとそんなことを考えていると、背後からは何かをこらえるような気配がした。

「〜〜〜〜っ」

俺が訝しむのも束の間。

メリーのこらえていたものは決壊し、ついには泣き声になった。

うあああ、と子供のように声をあげて泣くメリー。……いや、違うか。実際こいつは、子供みたいなもんなのだ。それで、それなのに、とんでもない道のりを歩いて来たのだ。

「頑張ったな。……頑張ったな、メリー」

蝉の声がうるさい中で、メリーの泣き声は雨みたいだった。

◇◇◇

十分ほど経って、ようやく泣き声がやみ、時折、ぐすっ、ぐすっ、と鼻をすする音が聞こえる。その音もだんだんとなくなり、ついには蝉の大合唱だけが響き出す。

うーむ……気まずい。

さっきあれほど恥ずかしいことを言ってしまったから気まずい上に、メリーの泣き声を聞いてしまってさらに気まずい。どうやってこの場を逃れたものかと悩んでいると、不意に背中にかかっていた体重が消えた。

と、同時に番号のプッシュ音がして、俺のスマートフォンが鳴り響く。

着信はもちろん、いつもの番号からだ。

ポケットから取り出して、とん、と受信アイコンを押す。

「……もしもし」

振り向くと、麦わら帽と白いワンピースの女の子がいた。

彼女は少し麦わら帽子と髪をかきあげて、スマートフォンを小さな耳にあてる。

そして、泣いた後の少しだけつっかえた声で言った。

「今、あなたの目の前にいます。私は――」

少女のその表情を見て、心臓の鼓動が速くなる。

……おいおい。コイツ、最後の最後で殺しに来やがった。

だってその女の子は、涙のあとを擦りながら、けれども真夏の強い陽射しの下で、向日葵のように笑ってたんだ。……そりゃもう俺としては、ちゃちなプライドなんて放り捨てて見惚れてしまうのが当然なわけで。

きっとイチコロになるってのは、こんな気分なんだろうな。

「メリーさん、です」

少女が名乗る。午後の木漏れ日のような柔らかい声で、少しだけ恥ずかしげに頬を朱に染めながら、その瞳でまっすぐに俺を見つめて。

俺はなんだかその少女を、無性に抱きしめたいと思った。